

31

あくせきじま

悪石島のボゼ

〔別 名〕 十島村悪石島の盆踊り

〔伝 承 地〕 鹿児島県鹿児島郡十島村悪石島

〔実施時期〕 旧暦七月一六日

〔実施場所〕 悪石島 テラ

〔伝承組織〕 悪石島の盆踊り保存会

〔実施場所〕

悪石島の「テラ」で行う。

〔実施時期〕

旧暦七月一六日に行う。

〔伝承組織〕

悪石島の盆踊り保存会が行う。

〔実施内容〕

悪石島のボゼは、大きな耳のようなものが頭からのび、その根元にお椀のような目、その下に大きく開いた口がある異様な容姿で、色は赤土色と黒の縦の縞模様で、体は青々としたビロウの葉で覆われている。日本中に様々な形態の神や鬼、化け物があるが、そのいずれにも類型できないところに大きな特徴がある。「鬼」というもののビジュアルが定型化する前の人々が持っていた素朴な「異形観」と、島にある物でつくるといふブリコラージュがこうした形態をもたらしたと思われる。

盆の最終日となる旧暦七月一六日の夕刻、盆踊りの最中に突然現れ場を乱し、人びとの邪気を追い祓う。集落の墓地に隣接するテラと呼ばれる場所に、三人の若者が赤土と墨を塗りつけた仮面を被り、



悪石島集落周辺



3体のボゼ

体にはビロウの葉を巻き付け、手足にはシユロ皮やツグの葉を当てがうなどして、ボゼに扮する。手には、それぞれボゼマラ、マラ棒と称する男根を模した長い杖を持つ。ボゼは、呼び太鼓の音に導かれ、盆踊りで人びとが集まる広場に現れる。ボゼは、ボゼマラの先端に付けた赤い泥を人々に擦り付けようと、観衆を追い回すことから、辺りは笑いと叫び声で騒然となっていく。この泥を付けられると、悪魔祓いの御利益があるとされ、特に女性は子宝に恵まれるという。騒ぎがしばらく続いたのち、乱打されていた太鼓の音がゆつたりとした調子になると、ボゼは体を揺るがすようにして踊りはじめ、再度急変の調子で再び暴れだし、やがてその場を去っていく。こうして、邪氣が祓われ、清まった人びとの安堵と笑顔が満ちる中、場を戻すために最後に盆踊りがもうひとりと踊りされ、以後は余興と称して夜が更けるまで歌って踊り、飲食に興じる。

下野敏見氏によれば「ボジェは、吐噓喇列島中、悪石島ではいまも盆踊りの時出現し、ボゼとも言う。(中略)ところが、それが出現しない平島でもその話は残っていて、『泣くとボジェが来っど』などと言って、親が子どもを脅したりする。ボジェの話は、中之島や小宝島でも言うので、おそらくとは吐噓喇各島にボジェ仮面神が出現したのであろう」とし、かつては十島村全島で見られた可能性を示唆している。

また仲松弥秀は、「テラ」という呼称について、琉球列島では、元々人骨を祀つてある洞穴を指す言葉だと指摘しており、十島村での「テラ」呼称もこれらと同様の系統の言葉で、おそらく墓地を指していると思われる。

【意義】

本件は、トカラ列島における来訪神行事の典型例を示すものである。特に、その異形異体の様態は希少である。また、現れる時期が、本土の仮面神は冬・春とするのに対し、盆という夏・秋の時事とすることも、日本列島における暦のあり方、一年の区切り(節)を考

える上で貴重である。また、邪氣を祓うとともに子孫繁栄を促す行為を伴うなど、我が国の来訪神を理解する上で重要であるとともに、ヨーロッパの仮面神「クランプス」の共通点などもあり、人類文化を考察する上でも有意義な行事だと言える。

【参考文献】

- ・ 仲松弥秀 一九七五 『神と村』 伝統と現代社
- ・ 下野敏見 二〇〇五 『南九州の伝統文化』 第一巻、第二巻 (小島 摩文)

〔別 名〕 タケマイリ、トコロガン、トコーガン
(「所願」、「集落の願掛け」の意)

〔伝 承 地〕 熊毛郡屋久島町楠川地区

〔実施時期〕 八月二七日

〔実施場所〕 楠川集落天満宮から楠川前岳山頂まで参詣

〔伝承組織〕 楠川地区住民

〔名称〕

タケマイリと称される。「集落の願掛け」の意味で、「所願」とも称される。参加者自身を「今年のトコロガン」とも称している。

〔実施場所・実施時期・伝承組織〕

楠川集落の背後に位置する楠川前岳山頂(標高一二八五メートル)に祀られる山の神に参拝するために行う行事とされる。かつては、更に奥に位置する奥岳(石塚山・標高一五八九メートル)山頂まで岳参りを行っていた。その際には、二組に分かれ、石塚岳まで参る組は、山中で一泊した。かつて参詣者は、男性のみであり、白装束に草鞋、脚絆姿で参詣した。また、忌中の者や女性は登ってはならなかった。トビウオ漁を行っていた当時は、山の神に大漁祈願をする目的で、漁業者が獲れた魚を持って岳参りを行い、それを神前に供えていた。集落から願掛けと願解きを行う参詣者が、二人ずつ二組となり、一組は、一日早く奥岳に泊まり掛けで参詣し、今一組は楠川集落後背の楠川前岳へ日帰りで参詣する。戻りで両組は、三本杉で落ち合い、集落に帰った。参詣当日の早朝、楠川天満宮前の海辺で海砂と海藻(ホンダワラ・二〇一七年の参詣では採取されず)を採取し、天満宮灯籠に供えた後、海砂、海藻、塩、酒、洗米、賽銭、線香、蠟燭などを山頂の石祠に供え、集落繁盛、家内安全、航



楠川集落周辺



石祠を拝む

海安全、五穀豊穰、豊漁を祈願する。参詣から集落に戻ると、「うち向かえ場」と称される正木の塚状の森でサカムカエ（坂迎え）が行われる。

〔実施内容〕

・期日

二〇一七年のタケマイリは、八月二七日に、楠川前岳への参詣として行われた。奥岳への参詣は行われなかった。かつては、出立の前夜、天満宮か寺院でお籠もりをしたとされる。以前は四月に願掛けのタケマイリ、八月一五夜に願解きのタケマイリを行ったと言う。願解きのタケマイリでは、集落に戻ったトコロガンを十五夜綱引きの場に招待することもあった。集落住民が参加しやすい様に現在の期日とした。

・現況

二〇一七年八月二七日に岳参りが催行された。本年は、石塚岳には行かず、楠川前岳山頂への参拝となった。登坂のルートは、集落からノノヨケと称される山への入口、奥岳への入口と考えられている三本杉、前岳山頂となる。かつては、更に小杉谷を通って奥岳まで参詣した。

1 海砂の採取と天満宮からの出立

午前五時三〇分、楠川集落の浜に面して位置する氏神社の楠川天満宮（写真1）に岳参りの祭礼係が参集する。区長一人、消防団長一人、願掛け二人、トコロガン（所願）一人である。願掛けに山に登れば、願ほどこにもう一度登る必要があるとされる。トコロガン



写真1 楠川天満宮

2 ノノヨケへ参詣

楠川集落後背の道を上るが、途中で里と山との境界とされる場所を越える。この境界をノノヨケと称する。この場所の近くに杉の大樹の根元に石祠が祀られた場所があり、石祠には数一〇枚の円玉や焼酎の一合瓶が供えられている（写真3）。海岸から運んだ砂を供え、神を左右に飾り、焼酎（三岳）を茶碗に注ぎ、祠前に置かれた平石の上に残った分もそのまま供える。また、洗米と塩とを平石の上に盛る。蠟燭を灯し、平石に立てかけ、一人一人が線香に火を着け、二礼、二拍、一礼で拝む（写真



写真2 海砂を採取する

3 ノノヨケの樹木と石祠: A black and white photograph of a large, gnarled tree trunk next to a small stone shrine (ishidara) with offerings on it.

写真3 ノノヨケの樹木と石祠

4)。全員が拝み終わると、焼酎で御神酒上げし、蠟燭の火を消す。再び楠川登山道の登山を続けるが、道はかなり急峻であり、四十七曲がりと呼ばれる上り坂やガレ場をも登る。道がない場所は、樹木に付けられた赤いテープを目印に進んでいく。

3 本杉へ参詣

午前八時頃、三本杉に到着する(写真5)。三

本杉は、三本の屋久杉が根本で融合した特異な形状を示している。杉が融合した根本の右側に、平坦になり腐葉土が堆積した洞があり、そこに石碑が納められている。石碑

頂部には「石」の線刻があるが、土に埋没しており、それ

以上は読み取れない。この石碑の前に、浜砂、洗米、塩、焼酎を供え(写真6・7)、蠟燭を灯して、

一人一人が火のついた線香を置いて拝み、焼酎で御神酒上げする。

この後再び登山を続ける。登山道の途中には、屋久杉の巨木・巨石が数多く見られ、鹿や猿の鳴き声も聞かれる。山頂に至るまでは、



写真4 蠟燭を灯し線香を供える

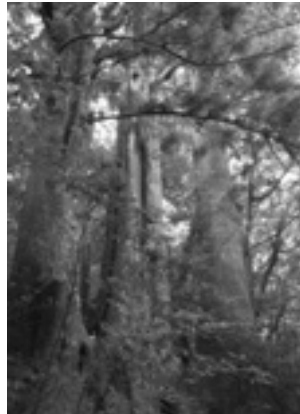


写真5 三本杉



写真6 三本杉の洞に供え物を供える

崩落したガレ場や沢、急斜面が連続し、相当の体力が必要とされる。

4 山頂での儀礼

午前一一時頃、楠川前岳の山頂に到着する。山頂部分は少し開けており、岩の集積の上の手に、右から石祠が二基と石碑

が一基並び、その背後に小さな丸石の石碑が並んでいる(写真8)。最も大きな中央の石祠には、正面に「中山大権現」の文字が、右側に「楠川村 船頭中」(一部判読不可) 小さい石祠に

は、正面に「奉 南無中山大権□」(一字判読不可、おそらく「現」であると思われる。)、右側に「立主 楠□□」

(一部判読不可、おそらく「川村」と思われる。)&刻まれている。(鎌田

道隆氏の資料では、右の石祠は弘化二

(一八四五)年九月、中央の石祠は文

化五(一八〇八)年の記銘があるとさ

れるが、今回の調査では判読できな

った)また、平成八年に建立された世

界遺産祈念の石碑も設けられている。

石碑に被さった枯れ枝などを除いた

後、石祠前の平石に焼酎一合瓶を二本、

右に塩、左に洗米を置き、蠟燭に火を

灯して立てかける。次に焼酎の蓋を開

いて、祠と石碑に掛ける。

その後、浜砂を平石の左に盛る(写真9)。

以上の供え物を捧げ



写真7 三本杉への供え物



写真8 楠川前岳山頂の石祠と石碑



写真9 海砂を備える

た後各自は線香に火を着け、それを平石に横置きにおいて二礼、二拍、一礼で拝む（写真10）。

この後、御神酒上げを行う。山頂で昼食の後、午後〇時四五分頃、下山を始める。行きと同じルートを進む。午後二時頃白谷雲水峡の駐車場で、迎いの車に乗り、登山を終わる。

5 サカムカエ

集落に戻り、休憩した後、午後三時四八分から集落と山の境に位置する正木の森でサカムカエを行う（写真11）。サカムカエをマチウケとも称する。サカムカエを行う森は、直径一〇メートルほどの

土壇に樹木が生い茂った塚状の森であり、五基の石塔と、二基の石碑が建てられている。石碑の周りには、浜で採取した海砂が撒かれ、石祠前には二段の木製の祭壇が設けられる。左手の新しい大きな石碑には「一品法寿大権現」と彫られている。中央の古い石碑には、「奉寄進 木口（戸か）清次」と彫られている（写真12）。石祠群の前方左右には榊が建てられ、その内側に蠟燭が立てられる。下段の祭壇に



写真10 石祠を拝む



写真11 サカムカエの森



写真12 石碑と石祠

は、楠川集落の婦人部が用意した料理が詰められた丸形の重箱が三つ並べられる。一番左の重箱には、木灰の灰汁に一晚浸けた餅米をダンチクの笹で包んで蒸したツノマキ（角巻）が、中央には、トビウオの塩焼き、落花生、里芋や昆布、油揚げなどの煮染め、枝豆、里芋煮が、右には、おはぎが入れている。上段には焼酎の一升瓶が、拝礼に用いる線香が置かれる。このサカムカエには、前岳への参拝者だけではなく、集落の住民から男性達と女性達が参加し、里の者達がタケマイリから帰った者達を集落の境で向かえる形をとる。楠川集落に位置する法華宗（本門流）本蓮寺住職（宮之浦久本寺住職兼務）が読経し、その後、まず参拝者が線香を供えて手を合わせて仏式で拝礼し、その後、集落の者達が拝礼する（写真13）。

6 民館での直会

サカムカエが終わると、楠川集落の楠川公民館で直会となる。料理は、先のツノマキ（写真14）の他、赤飯のおにぎり、里芋煮、枝豆、落花生、薩摩揚げ、トビウオの塩焼き、タケノコと人参のきんぴら、タケノコ・人参・カボチャ・コンニャク・油揚げ・昆布の煮染め、おはぎなど多彩である（写真15）。区長の挨拶の後、飲食となる。演壇上では、楠川盆踊りなどが披露された。



写真13 僧侶による読経



写真14 ツノマキ

「由来・伝承」

楠川集落からご提供いただいた資料では、ダケマイリは、長享二（一四八八）年には行われていたとされる。以下資料より引用する。「長享年間（一四八七から一四八八）に屋久島に地震が頻した。山は鳴動して止まない。たまたま種子島に巡錫中



写真 15 直会の料理

だった京都の本願寺七世管長日増上人に屋久・種子の領主種子島第一一代島主時氏は、鳴動を鎮めるため祈願（祈祷）をお願いした。日増上人は、長享二年（一四八九）六月屋久島に渡って弟子達をつれて御岳にのぼり七日間の誦経を唱えたところ奇しくも鳴動がおさまったと『熊毛郡宗教史資料』は伝えている。その折に御岳をはじめ各山頂に法札（最初は木柱のち碑石、俗に「一品法寿大権現」という）が建てられた。「ものとされる。この実績が、現在のタケマイリ行事の起源であるかどうかについては、資料では、これ以前から継承されていた山岳信仰と関わる可能性も指摘されている。楠川集落では、御岳の山の神に海砂を供え、願掛け、願解きを行う為に参詣する行事として認識されている。

「意義」

屋久島のタケマイリは、屋久町文化財保護委員会によって、各集落における継承・実施の状況が調査され、また、復活に関わる活動が行われている。この調査によると、二〇一三年から二〇一五年にかけて屋久町でタケマイリが行われているのは、永田（永田岳）、吉田（吉田岳）、一湊（一湊岳）、宮之浦（宮之浦岳）、楠川（楠川前岳）、梶川（高岳・石塚岳）、小瀬田（愛子岳・向岳）、長峰（向岳）、船行（三野岳）、松峯（明星岳）、安房（明星岳・太忠岳・中島権現岳）、春牧（前岳）、平野（蔵灰野）、麦生（高平岳）、

原（モッチョム登山口）、尾之間（宮之浦岳）、小島（芋塚岳）、平内（破沙岳）、湯泊（烏帽子岳・七五岳）、中間（七五岳）、栗生（栗生岳）の各集落と岳である。时期的には旧暦四・五月と旧暦または新暦九月の二回が多く、一〇人前後で行う地域と、男性二人〜四人で行う地域が見られる。基本的にはタケマイリで岳に登るのは男性であり女人禁制とされるが、近年では女性の参加も認める地域もある。供えものは、塩・米・焼酎・賽銭がほぼ共通するが、特徴的なのは、浜砂を供えるという点である。これは、永田、吉田、宮之浦、船行、松峯、安房、春牧各集落に見られる。

また、永田、宮之浦、楠川、湯泊、栗生各集落では、シャクナゲの花や枝を岳から持ち帰ったとされ（楠川では現在行われていない）、吉田、船行、小島、中間ではシキミや榊を持ち帰るとされている。岳から帰った者を向かえるサカムケ（サカムカエ、坂迎え）、マチムケ（待ち迎え）も多くの集落で行われた。

これらの集落の多くは、一時、タケマイリを途絶していたが、二年前に宮之浦地区でタケマイリを復活したことを契機として、行事を復活している。委員によると、屋久島が世界自然遺産登録されたことで、屋久島の岳や森という自然と人々の生活との関係が見直されたことも大きな要因であるとされる。

タケマイリは、基本的には海と山とが里の登山遙拝者を介在して交歓する行事であるといえる。行事の上で意識されているのは岳に祀られる権現や山の神であるが、漁業者が、漁期に大漁を願ってタケマイリを行うなど、沖からも望む事ができる各集落の岳の山の神が、漁撈にも深く関わっているとの認識を見ることが出来る。また、春先のタケマイリで山からシャクナゲの花や枝を里に持ち帰り、それを集落の各戸に分ける行為は、春を迎えた自然の山野の生命力を、農事を開始する時期に里へと迎えるという意味も有していると考えられる。また、岳への登山と遙拝を行う者は、集落全体の願いを背負ったトコロガンであり、また、彼自身も神聖な場である岳へ登ることにより、自然の生命力溢れる場においてその身を清め、精神的

な再生を行う意味もあったと考えられる。

楠川集落のタケマイリに関して言えば、出発する天満宮は海に面して祀られる、海と里との境界に位置しており、その前の浜から海砂が採取される。集落と山との空間的境界は、ノノケとして明確に意識され、また、山から帰った者達をサカムカエで迎える場も、集落と山との境界に聖なる森として設けられている所にも特徴が見られる。山の神が納める神聖な岳の自然の空間と生活の場である里、そして今一つの自然の空間である海、各々の間に、境界的な聖地が設けられている。更には、出発点である天満宮は神道であるが、途中の遙拝場所や岳山頂では、柏手を打ちながら線香を供え、サカムカエは法華宗僧侶を迎えて仏式で行われる。行事全体を通じて見ると、神仏習合の状況が示されており、この点にも関心が持たれる。

【参考資料】

- ・鎌田道隆氏手稿 二〇一一 「楠川村岳詣り」
- ・牧実寛氏手稿 二〇一七 「楠川歩道（登山道）について」「楠川岳参りコース」
- ・中川正二氏手稿 二〇一五 「各地区岳参りの現況調査票（二〇一三～二〇一五）」

（徳丸 亜木）

33

あくねしは るみなかたんじや かんまい
阿久根市波留南方神社の神舞

〔別 名〕カンメオドイ（神舞踊り）

〔伝 承 地〕阿久根市波留

〔実施時期〕八年ごとに旧暦七月二八日

〔実施場所〕阿久根市波留南方神社

〔伝承組織〕阿久根市波留南方神社神舞保存会

〔名称〕

鹿児島県無形民俗文化財「阿久根市波留南方神社の神舞」として昭和四三年に指定された。その時の名称を本稿でも使用した。

神楽のことを鹿児島では神舞（カンマイあるいはカンメ）と言う。これは「楽」ではなく「舞」に重点をおいているからであろう。

〔実施場所〕

神舞が行われた当初からの場所である阿久根市波留集落にある南方神社で現在も続けられている。

〔実施時期〕

阿久根市波留の南方神社では、旧暦七月二八日の例祭で波留村庄屋の交代時期の八年目ごとに神舞が舞われ、地頭も観覧し五穀豊穡を祈る豊年祭でもあった。その後、庄屋制度はなくなったが、八年に一回の神舞の奉納は南方神社の例祭で続けられている。

〔伝承組織〕

阿久根市波留地区の集落民と南方神社神舞保存会が協力して伝承している。



阿久根市波留周辺



チハリ

「由来・伝承」

由来や起源は明らかではない。阿久根領主・五代莫祢兵衛尉成友が、旧薩摩藩高江郷雲日に鎮座の諏訪神社を暦応（南北朝時代の北朝、光明天皇朝の年号。建武五（一三三九）年八月二八日・一三三八年改元、暦応五（一三四三）年四月二七日一三四年康永に改元）年間にこの地に勧請奉斎したと伝えられている。

昔は神領一町五反に及んだと言う。莫祢院司系（莫祢氏は平姓）の平兼次が大願主となつて、長禄二（一四五八）年卯月一七日銘の神鏡を寄進したと言う。

鬼神舞に使用されている面は宝暦年間に大工東園善三郎が作り奉納されたと伝承されている。

南方神社の神舞は岩戸神楽の系統で、一部に歌舞伎風の所作が見られると伝えられている。このことについては、藩政時代河南源兵衛という豪商を始めとした船持ち商人たちが集まって海神を祭り、航海安全を祈り、毎年旧暦八月一五日に村役者による狂言芝居をしていたという。

これが神舞にも影響しているという風に伝えられている。

神舞に出演する人々は、神舞奉納日の一週間前から宮籠りして稽古をするという厳しい決まりがあり、伝承されてきたが、最近は勤め人も多く、宮籠りを一週間するということが難しくなったため、三日間の宮籠りという風に変化した。特に神舞奉納日平日になると、



写真1 南方神社の参道

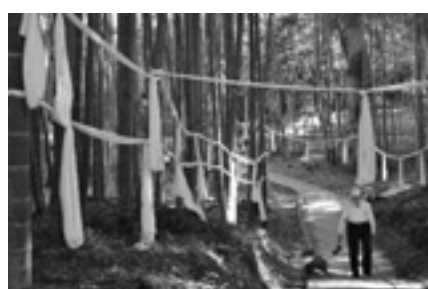


写真2 木綿布が張り巡らされた山道の竹林

準備などに携わる地区民の協力も得られにくくなってきているのが現状である。

この神舞では神社参道、舞庭に白い木綿布（以前は羽二重であった）を張り巡らせるので、この張り巡らせる作業も集落民の協力で行われる。

また、白い木綿布は三六五反から四〇〇反必要であるという。この木綿布を保存会から集落の各家庭にお願いして奉納して（借りる）もらうことになっており、使用した木綿布は、神舞が終わったらその日のうちに奉納者に全て返すことになっている（写真1・2）。

「実施内容」

1 準備

早朝に神社関係者（神舞保存会などの関係者）が海に行き潮水を竹筒に汲み、海岸から神社に関係ある場所一一か所に二本一組を二組ずつ奉納しながら神社まで歩く。一一か所は次の通りである。

八坂神社↓黒神岩↓菅原神社↓水の神（個人宅庭にある）↓まどころの不動明↓田の神（作の神）↓八幡さま↓田の神↓石鳥居↓拝殿前（階段の所）↓拝殿の順に奉納する（写真3・4）。



写真3 塩水の入った竹筒①



写真4 塩水の入った竹筒②

早朝から集落民が集まって、舞庭、神社参道（石鳥居のある参道と神社横にある竹林参道）神社境内などに、白い木綿布を一反ずつ結び付け、結界を作る。

舞庭を整備し、神舞がスムーズに行われるように舞台装置などの準備をする。

舞庭は四隅に白い布を巻いた孟宗竹を立てる。これが柱となる。この柱を中心として頂上に白い紙の幣一本と五色の幣二本の計三本の幣を挿した作り物が取り付けてある。柱と柱の間には写真のように木綿布を渡し張り巡らせてある。

舞が始まるまでは、四本の柱の間には注連縄を張ってある。四本の柱の下方には幣と榊の枝、竹などを括り付けてある(写真5)。



写真5 舞庭

神殿に向かって右前の柱には塩を入れたワラツトを下げてある。また、塩を下げてある柱と、その手前の柱の間には剣舞のときのトンボを切る「返り場所」が設けてある。ここも四方に笹竹を立て注連縄を張ってある。

神殿に向かって左前方に天岩戸を作っている。

神舞出演者や関係者は着替えや道具類などの準備をする。

集落民は弁当(お重箱にいれて)持参で、境内周辺にゴザなどの敷物を敷いて観覧する。

また、寄附をした人は階段状の観客席が設けてあり、寄付額に応じて場所が決められている。

2 神舞の種類と内容

(1) 神舞の種類

神舞は鹿児島県内では「かんめ」と言われている。波留集落では「カンメオドイ」とも言われている。

「チハリ」、「神降し」、「瓶舞」、「弓舞」、「剣舞」、「田の神舞」、「將軍舞」、「鬼神舞」の七種目で、境内に設けられた舞庭(舞台)で前の舞いが終わったら入れ替わりで続いて次の舞いが舞われる。

(2) 神舞の内容

・チハリ

このチハリは神舞ではないが、露払いという大切な役がある。

神舞の始まる前に神社・拝殿内で神事が執り行われる。拝殿には面が掛けてある。

神事の後、舞の始まる前に舞庭で「チハリ」という露払いが行われる。

男子が鉦や太鼓を打ちながら「アーヨイ」と声をかけ、鉦は花笠を被り(花笠には切れ込みの入った白い紙を下げてあり、顔が隠れるようになっていいる)。白上衣、絰模様の袴、赤いタスキ、太鼓持ちは女物の着物、花笠、背中に五色の幣、胸に太鼓という出で立ちである。

舞台の周りを数回周り、舞台の中央二列に盛られた塩の山(海岸から取ってきた砂を盛ってある。)を足で踏み均しながら退場する(写真6)。

その後、白上衣に水色の袴を着けた楽人六人がそれぞれ塩、神酒の瓶、太刀を載せた三宝を持ち神前に進み、塩の三宝は舞台の柱の下、神酒の瓶、太刀は神前に置く。これらは後の舞の採り物である。

楽人は神前の奏楽の所に笠を被って座る。楽器は縦笛、太鼓、銅拍子で各二人ずつである。縦笛は自作で大名竹を自分で採し製作し漆を丁寧に塗る。古いもので百年位前のものを使ってもらえる。神舞で縦笛を使うのは少ないのではないかと思う。

1 神降(かみおろ)し

舞の始まりにあたって、諸国から集まって来た神々を紹介しお礼を言う。

笠を被った楽人の案内(先導)で神官の衣装を着た一人が、長さ二メートルほどの大きな御幣を持ち、お祓いをして祝詞を奏上する。その後、再びお祓いをして退場する(写真7)。

2 瓶舞 びんめ

四人の舞人で、集まった神々にお神酒をささげ、氣勢をあげるといふ優雅な舞である。神前で左手に瓶を取り、右手に扇を持って舞い、最後に神前に瓶を置き退場する。

3 弓舞 ゆんめ

四人ずつ二列の八人で舞う。白ハチマキ、白上衣、陣羽織、背に一〇本の矢を背負っている。武の神々が勢揃いして向かい合って、お互いの弓の端を持って舞ったり、弓に矢をつがえて弓を引くまねをする舞である。

4 剣舞 つるめ

四人ずつ二列の八人で舞う。神々が酒を飲み酔って剣を抜いて舞い氣勢をあげる。また、舞いの途中で柱に供えであるワラツトの中の清めの塩を掴み撒く。その後、八人の中の四人は神前に供えた剣(太刀)を手に舞いながら、腰に挿した小さな御幣をワラツト(塩が入っている)が取り付けてある柱の下に差込み退場する。残りの四人は前の四人が置いた剣(太刀)を取り、二本ずつの剣を持ち舞庭の右手横に作ってある「返り場所」傾斜をつけた盛土の上にムシロを敷いてあり、四方に笹竹を立て注連縄を張ってある神聖な場所」でとんぼ返りを行う。

5 田の神舞

黒の紋付、黒足袋、陣笠、黒面を付け、右手に団扇を持ち、左肩



写真7 神降ろし



写真6 チハリ

に臼を担いだオンジョといわれる田の神と、女装し紫色のオコソ頭巾・前掛けをして扇と赤いタスキで白足袋のヨメジョの二人が餅つきをする様子を演じる。搗き終わったらオンジョは臼を担いで退場する。

6 將軍舞 しょうぐんまい

田の神と入れ替わりに將軍舞になるが、大きな御幣を持った將軍とドンサク二人、道化一人が現れ、將軍は神前で祓いをし、ドンサク二人は滑稽なしぐさでおもしろおかしく演じ、ドンサク二人が退場すると、道化一人がカガイという背負いカゴを背負って観客の近くで、いざりながら滑稽なしぐさをする、観客がオヒネリをカガイの中に次々と入れてくれる。

7 鬼神舞 きしんまい

手力男命が岩戸を開く舞いで大神が現れるのを喜び舞う様子を演ずる。赤面を着け、右手にムチ、左手に櫛を持ち、舞の中で岩戸開きの所作と鬼神前の詞章を言う。

【意義】

八年に一回の神舞であるので、舞う人や楽人に入れ替わりがあり大変であるが、古くからの伝承で八年に一回の奉納が集落民や保存会の方々協力により続けていることは意義深く、貴重である。

【参考文献】

- ・真鍋隆彦 一九六九 「阿久根市波留南方神社の神舞」『鹿児島県文化財調査報告書第一六集』 鹿児島県教育委員会
- ・同 一九七七 同第二四集
- ・阿久根市誌編さん委員会 一九七四 『阿久根市誌』 阿久根市立図書館

(牧島 知子)

34 さつまいおうじま 薩摩硫黄島のメンドン

〔別 名〕 三島村硫黄島の八朔太鼓踊り

〔伝 承 地〕 鹿児島郡三島村硫黄島

〔実施時期〕 旧暦八月一、二日

〔実施場所〕 硫黄島熊野神社の前の広場及びその周辺

〔伝承組織〕 硫黄島八朔太鼓踊り保存会

〔名称〕

平成二九年三月三日に、「薩摩硫黄島のメンドン」として国指定重要無形民俗文化財に指定された。

〔実施場所〕

熊野神社の前の広場及びその周辺

〔実施時期〕

八朔の行事日となる旧暦八月一、二日に実施する。

〔伝承組織〕

黄島八朔太鼓踊り保存会が、保存・伝承に努める。

〔由来・伝承〕

昭和三八年『鹿児島県文化財調査報告書第一〇集』では、村田熙は次のように報告している。

由来ははっきりしないが、古老の話によると「慶長三年、豊臣秀吉が朝鮮に出兵した時、島津義弘に従って硫黄島からも従軍したのが旧家、長濱吉延と岩切、芥川（ちりきり）の三人であった。泗川の戦いで島津が敵にとり囲まれ窮地に陥ったので、これ



三島村硫黄島周辺



熊野神社から駆け出すメンドン

をみた吉延が敵中に踊りこんで太刀を振りかざして敵を追いちらし、藩主を助けて戦功をたて、凱旋ののち、藩主から恩賞を賜り、大いに面目をほどこしたので、その凱旋祝いとしてこの踊りを奉納するようになった」ということである。

ここでも、古老の話として島津義弘を由来とする話が伝わっている。別項でも述べているが、島津義弘との関連を由来とする民俗行事が鹿児島県内では多い。この項では、地元でこうした語りがあつたことが伝えられていた言うことを指摘するに止める。村田熙の書き方も直ちに古い由来としてとらえられないとするニュアンスが出ているように思われる。

【実施内容】

薩摩硫黄島のメンドンは、八朔の行事として、旧暦の八月一、二日に現れ、土地と人々の邪気を祓う役割を担っている。邪気を祓う者の常として異形の姿であるが、恐ろしいと言うよりは、どちらかというとユーモラスな姿でもある。

行事としては、熊野神社前の広場で若者たちが輪になって八朔太鼓踊りを奉納することから始まる。全国に「八朔踊り」を称する踊はいくつかあるが、三島村硫黄島の八朔踊りは、背中に八幡を背負い、胸に太鼓を抱いて、この太鼓を叩きながら踊る。芸能としては、全国にみられる風流系ふうりゅうけいの踊で、その中でも囃子踊りと呼ばれる系統である。踊り手たちが踊っていると、突如、拝殿の裏からメンドンが走って乱入してくる。踊り手達の周りを三周し、去って行く。一体のメンドンが去っていくと、その後、次々とメンドンが走って来て、踊り手の邪魔をしたり、観客達の中に入って、手に持っている神木であるスッペン木とよばれる柴（枝）で観客を叩いたりして暴れる。叩かれると魔が祓われると言う。

こうして、メンドンは神社を出たり入ったりしながら、せわしく駆け回り、翌日の夜中まで島内各所に出没する。

翌日には、「叩き出し」といって、太鼓踊を踊りながら島内を一巡する。この時メンドンは行列の先頭に行く。海岸に到着すると、揃って海に向かって悪いものを追い祓う。最後は神社に戻って締めめの踊りをし、あとは「花開き」と称する直会となつて、行事は終了する。

【意義】

本件は、種子島・屋久島地方における来訪神行事の典型例を示すものである。特に、その奇怪な様態は希少であり、また、出現の機会を本土では冬・春とするのに対し、八朔という夏・秋の時季とすること、あるいは魔を祓う行為を伴うなど、我が国の来訪神を理解する上で重要である。

八朔は、旧暦八月一日（朔日）のことで、全国的には、八朔節供、田実（たのみ）の節供などといわれている。稲の収穫を目前にしての豊作祈願や予祝を行うと考えられている。また、八朔盆と言つて、盆月の終わりを意味する伝承もある。こうした節日に、一年の節となる来訪神が出現するところに、本祭りの特徴を見出すことができる。

【参考文献】

・村田熙 一九六三 「太鼓踊大島郡三島村硫黄島」『鹿児島県文化財調査報告書第一〇集』

（小島 摩文）

くろしまくろおじんじやたいさい
黒島黒尾神社大祭（九月祭りを中心に）

〔別 名〕 黒尾神社大祭

〔伝 承 地〕 鹿児島郡三島村黒島大里集落

〔実施時期〕 毎年二月九日・九月一〇日・十一月一〇日

〔実施場所〕 鹿児島郡三島村黒島大里黒尾神社・蔵王権現社

〔伝承組織〕 大里集落

〔名称〕

黒尾神社大祭は年間三回行われ、二月祭り・九月祭り・霜月（十一月）祭りと呼ばれる。いずれも現在は新暦で行われる。

〔実施場所〕

三島村黒島の二つある集落（大里と片泊）のうち、北東側の大里集落内の黒尾神社にて、冠岳中腹の蔵王権現を迎えて行われる。大里は平成二八年現在、六六世帯・一〇一人である（片泊はおよその半分）。

〔実施時期〕

毎年新暦二月九日、九月一〇日及び十一月一〇日の午後一時より開始。荒天その他による定期船入港時刻の変更などの事情によって開始時間は前後することがある。

〔伝承組織〕

黒尾神社には年間に二月祭り・九月祭り・霜月祭りという三つの大祭があり、催行は大里集落が決定し、神主（太夫と言う）を中心とする祭祀集団に依頼する形をとる。催行する場合、集落から神役目・エットウ・カシキとかつて呼ばれた諸係（現在は一括して世話役と呼ぶ。）が選出されて、所定の役割を果たす。逆に言



大里集落周辺



蔵王権現での祭祀

えば世話役が不在では大祭は催行できないことになる。

大祭執行を依頼される祭祀集団は、太夫と七名のシヤケシ（社家衆）から成っていた。シヤケシも継ぐべき家筋が決まっている。シヤケシ屋敷の住人が替わった場合、新住人はシヤケシの役割も引き継いでいる。近年は離村者もあつて四人で推移していたが、平成二八年の九月祭りの時点では二人となった。うち一人は太鼓役で、これが不在では執行できないので、代行を立てている。また大祭には一定の役割をもって庄屋も参加するが、これも不在のため代役を立てている。まとめると平成二八年の大祭は、太夫一人・シヤケシ四人（うち二人は代行）・世話役（三人）の合計八人に庄屋役一人（代行）が加わって執行された。

「由来・伝承」

黒尾神社は元々黒尾大明神社といい、黒島の最も重要な社だが（片泊の菅尾神社はこの枝社と言われる。）、ご祭神は不明。『三國名勝図会』には「住吉神か。ご神体は大小一三の石」とある。年間三つの大祭のうち九月祭りは新米を捧げ、神人が共食する祭祀である。これを除けば三つの大祭はまったく同じである。

大里集落の内と周辺には、明治の神社統廃合を免れた大小一七の神々（ほとんど小祠）がある。祭典の時にはこれらの神々の名前を讀み上げる。黒尾神社境内には、①中心にもっとも大きい黒尾神社がある。それに向かって右手に②スサノオ大神の社、向かって左手に③コンピラ大神の社がある。黒尾大明神社とコンピラ大神社の間に④露天の小さな石積みがあり、前にツボが置かれている。これを通称オツボ様（または八大龍王）と言う。そして向かって左側の奥に⑤低く細長い屋根があり、この中に各家の氏神とされる十数個のコミヤ（ご神体は丸い自然石。）が並んでいる（正確な数も神名も不明）。このコミヤは元々各家にあったものを集めたものだと言う。以上の社殿は全て赤く塗られ、保護屋根で覆われている。

境内は道路から少し離れて一段高くなっており、向かって一番右

にはゴクヤと呼ばれる三坪ほどの小屋がある。九月祭りではここで神饌（ご飯）が炊かれる。境内は祭典中は土足無用の聖域となる。社地の背後は鬱蒼たる棕櫚の森だったというが、現在は多くの建物が立ち、その面影はない。

社殿と道路との間に壁のない屋根だけの拝殿（五坪ほどの土間）が建っている。祭りの時は畳六枚が敷かれる。拝殿から本殿に登る小階段の手前には、小さな拝み石があり、花瓶が供えてある。大祭の後半、ここにも花米と神酒が供えられる。

拝殿内の道路際の壁には小さな釜が据えられ、拝殿に向かって左脇に倉庫がある。道路を挟んで赤い鳥居があり、その向こうは下り坂の参道で、樹木に覆われた神さびた雰囲気を持つ。下りきったところにもうひとつの鳥居がある。上の鳥居と下の鳥居の間の参道には六つの鳥居があった。現在は小石積みが残るのみ。

黒尾神社は東を向いており、正面の冠岳の中腹に蔵王権現がある。集落から谷をひとつ渡り、急峻なゴロ石の道を登らねばならない（二〇分ぐらい）。深い樹間の斜面に鎮座する蔵王権現に向かって右に稻荷大神、左には二つのミニ小祠（神名不明）がある。蔵王権現とミニ小祠の間には大岩があり、これが冠大神の仮宮である。冠大神はもと冠岳頂上の灯台の傍らにあったが、平成八年一月、灯台が海側に崩落し、冠大神はかろうじて残った（しばらくして崩落）ので、ご神体（石）を少し下方のコダケという場所（斜面）に遷宮している。

三大祭りはいずれも、まず蔵王権現に行つて祭祀をし、神様を黒尾神社に迎えて行われる。太夫とシヤケシについての伝承を記しておく。現在の太夫は昭和二九年生の男性が、先代は父親で現在も高齢ながら祭祀の補助をしている。屋敷は昔からの太夫屋敷である。盆踊りや八朔踊りなどもこの屋敷の庭で行われる。終戦直後政行氏が復員して父親が死亡し、昭和三〇年に正式に継ぐまでの一〇年間は、父親の弟の寺屋敷に住む叔父が太夫をした。寺屋敷は清月寺跡にあり、太夫家とは長く縁戚だったと言う。

太夫と七人のシャケシには何々コウザカという名称が付いている。太夫家はカンヌシコウザカ。ガンシキ（銅拍子）を叩くシャケシはイチマサドコロノイチノコウザカ、太鼓役はツカサコウザカ（別名伊勢太夫）といった。コウザカは地元では神性の文字が当てられるが、原義は不明である。宮崎県西部山中の狩猟に関わるコウザキ神とのつながりを感じさせる。

「実施内容」

平成二八年の二月祭りを牧島知子氏が、九月祭りを松原が調査したが、内容は九月祭りでのオゴクを炊くことを除き、霜月祭りも含め全く同一なので、松原の本報告をもつて二月祭りの調査報告も兼ねることにする。

準備 午前中の早い時間に太夫とシャケシは各自、大里港脇の磯浜（ウラ浜）で禊ぎをする。既に黒尾神社境内と蔵王権現は集落の人たちによる清掃作業が始まっている。手分けして蔵王権現も含む四つの鳥居全てにハケ（しめ縄）を付ける。その間、太夫は普段着のまま黒尾神社参道と境内を潮で祓い浄め、古い鳥居のあった場所（御幣を差し、全て花瓶の櫛を取り替える）。

神社集合と出発 普段は午後一時開始だが、平成二八年は定期船の入港に合わせて正午頃から開始。太夫宅から世話役（普段着）が太鼓を肩に担いで叩きながら神社へ出発（これで祭祀開始が集落中に知れる。）、太夫の道具を持った世話役と太夫（青い着物）が続く（衣装については後述）。参道を通って数分で黒尾神社へ行く。

太夫は着くとすぐに境内の全ての社殿に花米を供える。クワズイモの葉で蓋をした酒壺も供えられている。そして本殿に背を向けて拝殿に坐す。既に着座している青い着物のシャケシ三人（太鼓役のシャケシが離島しているために、代理の太鼓役二人を含む。）と向き合う形で、まずオカユ（本来は発酵させた神酒）を戴く（これをノーライと言う。）。

太夫の催促の言葉で一同立ち上がり、祭りの衣装に着替える。シ

ヤケシ三人は袴姿、太夫は白い浄衣に烏帽子を冠り、頭からツナを掛けて背中に垂らす（ネックレスと逆）。手には笏。準備が整ったところで着座し、太夫の「うったつてもれ申そうかい。」の言葉で立ち上がる。世話役は直ちに太鼓を肩に担ぎ、時々叩きつつ参道を降りて行く。道具持ち世話役のあとから太夫と太鼓役シャケシが続く。行き先は向かいの冠岳中腹（蔵王権現）。起伏のある集落内の道路を過ぎ、井之口川を渡って石の多い登り坂を登ること約二〇分で蔵王権現に着く。

蔵王権現祭祀 到着すると太夫は全ての社に花米を供え、蔵王権現の前に坐し、太鼓役シャケシは社殿に背を向けて坐し（見学时は代役のために横向き。）、祭祀が始まる。祓い言葉・開扉・社殿内の掃除・献饌・両側の小祠に献饌・祝詞奏上・撤饌・閉扉という順番で進行する。この間、太鼓が打たれる。この式次第は黒尾神社でも基本的に同じである。終わると、世話役が来る時と同じように太鼓を肩に担ぎ、時々叩きながら下山する。これが集落を通過するとき、まもなく黒尾神社での祭祀が始まること知れ渡る。一同があとに続くが、太夫は一番最後と決まっている。太夫の背中に蔵王権現の神様が背負われているからである。

黒尾神社祭祀開始 黒尾神社に戻ると、蔵王権現で太鼓を叩いた代理シャケシ（袴）は定期船荷役のために退場、代わりの太鼓役シャケシ（袴）、ここから新たに加わったガンシキ（銅拍子）役のシャケシ（白浄衣）、庄屋役の人物（シャケシではないので普段着のまま可。）が座っている。出発前にいたもう一人のシャケシ（袴）の姿が見えないのは、ゴクヤに入ってオゴク（ご飯）を炊いているからである。村の人々も集まってくる。

オカグラ奏上 太夫は拝殿にあがると、本殿に向かって坐し、太鼓を自分の前に据えて、これを両手のバチで右の皮を叩きながら祝詞を奏上する（これをオカグラという。）。次に本殿にあがり、神々の名前を読み上げ、祓い言葉を奏上する。この間、拝殿の太鼓役シャケシは後ろ向きになってスタンバイする。ガンシキ役シャケシは

横向き。本殿の太夫の祓い言葉が
終わりカシワデが打たれると同時に
奏楽（太鼓とガンシキ）が始ま
る。

社殿内の清掃と献饌

太夫はまず
本殿内からキンペイを取り出して
捧げ持ち、拝殿に降りて庄屋役へ
渡す。本殿に戻って内部の掃除を
し（坐したままがみ込む姿勢）、
壺を取り出して世話役に渡し、世
話役（二人）はこれをバケツの水
で洗って太夫に戻す。次に太夫は
お膳を取り出し、世話役はこれ
を洗ってゴクヤの窓に差し出す。ゴ
クヤからはお膳にオニギリを載せ
て差し戻される。本殿内に三つ
のお膳を供えたあと、先ほど洗った
壺に御神酒を注ぎ、扉を少しだけ
閉めたところで奏楽も止む。オニ
ギリの膳は本殿左右の小祠にも供
えられる。

太夫は本殿を降り、右手のスサ
オノ大神の前に移動し、御扉を開き、ここで再び奏楽。太夫は同じ
ように壺を取り出し、これを神役が洗って戻し、神酒を注ぐ。以下
概略同じようなことを境内社すべての前で言い、本殿に戻って先ほ
ど少しだけ閉めた扉を再び全開し、拝殿に降りてキンペイを受け取
り、これを本殿内に戻す。そして高々と祝詞を奏上する。ここが祭
祀のクライマックスである。祝詞が終わると同時に奏楽も止む。太
夫は本殿内の壺の神酒を別の容器に注ぎ移して世話役に渡し、拝殿
へ降りる。



写真2 黒尾神社



写真1 大里集落（東方向を見る）

写真2以下は2014年撮影

共食の儀とソデバナと撤饌 本殿から拝殿に降りてきた太夫は、本
殿に背を向けてシヤケシ達と向き合う。各自の前に小さな膳の上に
オカユとカライモとスノモノが載せられて出て、全員でこれを戴き
ながら会話も交わされる。直会に相当するが、直会とは言わない。

食べ終わると太夫はその位置で本殿に正対し、太鼓役は再び後ろ
向きとなる。太夫は右手で、各戸から供えられた米（お重に入って
いる。）をひとつかみして目の前に設けられた小祭壇に供え、これ
をお重の数だけ繰り返す。次に壺から御神酒を少しだけ注ぐ。

そして両手を広げ、左手は袖口を持ち、右手に持った鈴を小さく
振りながら、ソデバナという詞章を歌うように唱え始める。同時に
奏楽が始まる。一〇分ほどで終わり、本殿に進み出て撤饌。お膳の
ご飯はバケツに移され、直ちにゴクヤ脇にて行列して待機する参列
者に配られる。参列者はヒロウの葉を舟形にしてこれを受け止める。
このご飯のことをトイノコと言う。

太夫は扉を閉め、拝殿に降り、本殿を背にして着座し、シヤケシ
に挨拶をして終了。蔵王権現での祭祀は約三〇分、黒尾神社では約
二時間を要し、通常は午後一時から開始し、終了は午後五時頃であ
る。

「その他」

大里では太夫の関わる祭祀として年間一八回が行われており、う
ち三回の黒尾神社大祭は蔵王権現を迎えて行われる。三つの大祭は
基本的に同じである。本土の神社祭祀との違いは随所に見られるが、
かいつまんで特徴をあげておく。

1 大祭は集落が祭祀集団に依頼する形で行われる。

2 太夫やシヤケシにコウザカという名前が付いている。

3 太夫の拝礼の仕方は、二礼二拍一礼という本土のそれとはまっ
たく異なり、両手を広げたあと目の前の高さで両手の指を組み合
わせるという形である。これを「インを結ぶ」と言う。

4 太夫が立ったり座ったり、次の動作に移ったりする場合に、そ

れぞれ作法があり、唱え文句（イイク）も決まっている。

5 蔵王権現に出発する前にオカユ（神酒の代用）を戴くことをノーライ（直会か）と言い、本殿祭祀が終わった後の共食を直会とは言わない。

6 蔵王権現では九字の呪文が唱えられる。

7 本殿祭祀の前にオカグラ（祝詞奏上）があり、共食の後にソデバナ（神楽の一種）がある。

8 九月祭りのみゴクヤでオゴクが炊かれ、供えられたあとオゴクは村人に分けられる。これをトイノコと言う。

9 衣装は世話役（かつての神役目やエツトウのこと）は普段着のままでもいいが、シャケシは普段着では祭祀に参加できない。とは言え正装である白い浄衣を着用するにはカンツケ祝という儀礼が必要である。それを経ていないシャケシは袴を着ている。青い着物には祭祀が始まるまでの祭祀執行者の仮衣装である。鹿兒島市の諏訪神社神官から出された浄衣の着用許可状が二通残っている。延享四（一七四七）年と安政六（一八五九）年の日付がある。これとは別に千早と四組木綿手紐の許可状もある。後者は現行の首から背中に垂らすツナのことと思われるが、千早も四組木綿手紐も正確に何を指すのか、太夫も分らない。

以上、古い祭祀形態を留める祭りとして重要であることは明らかである。四月の集落総会（太夫もシャケシも参加）で大祭について相談が行われる。続けたほうがいいという意見が多いものの、村人の担当する世話役を引き受ける者が少なく、祭りの催行は危うい状態が続いている。



写真5 ゴクヤから差し出されるオゴク（オニギリ）の受け取り



写真3 蔵王権現での祭祀



写真6 祭祀の後半のソデバナ（神楽）の奏上



写真4 祝詞の奏上

〔参考文献〕

- ・村田熙 一九六六 『離島生活の研究』 集英社
- ・村田熙 一九九〇 『三島村誌』
- ・村田熙 一九九六 『村田熙選集三 南九州の庶民生活』 第一書房
- ・松原武実 二〇一三 「三島村黒島の黒尾神社九月祭り」 『鹿児島国際大学国際文化学部論集』第一三卷第四号

（松原 武実）

〔別 名〕 地域によって「餅タボレ」、「秋餅」など

〔伝 承 地〕 徳之島全島

〔実施時期〕 八月～一〇月

〔実施場所〕 実施される各集落内

〔伝承組織〕 各集落区長・青年団を中心に

〔名称〕

伊仙町では「イッサンサン」と言っているが、地域や集落によって呼び名は様々ある。例を挙げると伊仙町東部にある喜念、目手久、面縄などでは「タネブシ、タネツケ、ドンドン節」と言い、徳之島町尾母では「秋餅（アキムチ、イッサンボ）」、同手々では「ムチタボリ」と言う。天城町では「ムチタボレ（ムチタボリ）」と言う。

〔実施場所〕

実施場所は、主に各集落の公民館を中心に集落内の各家々を回る。今回調査した伊仙町東大田布について見ると、集落が上組、中組、下組に分かれている。この三つの集落民が上組にある「イッサンサン之碑」の所に集まり、ここで奉納し各組に分かれて家々を回り、最後は公民館に集まり貰ってきた餅などのおみやげを分ける。

〔実施時期〕

毎年、各地域とも八月から一〇月の間で日柄と集落内の各行事と照らし合わせながら行っている。

〔伝承組織〕

公民館の区長、青年団、育成会などを中心に小中高生、集落民総出で伝承している。



大田布集落周辺



イッサンボを持って唄う子どもたち

「由来伝承」

由来には二つあり、その一つが「イッサンサン之碑」に書いてある古老からの伝承で、徳之島が琉球服属後、数年間飢饉が続いた時に集落民が十五夜前の「つちのえさる」の日に豊作祈願をしたところ、翌年大豊作に恵まれた。その年が琉球服属後一三三年だったので「イッサンサン」と言い、毎年、十五夜前の「つちのえさる」に豊作祈願をしてきた。

もう一つは、奄美には種もみを蒔く行事として「種おろし」という行事がある。このことについて『南島雑話』に次のような記述がある。

1 種おろしについて

「種卸の節 倭の狂言芝居と云べきものにて、村々踊りありく。年々に其仕形はかはれり。皆人の妻子共なり。」

また別に「種卸し 竹の皮を用て作_二鬼面_一、村中徘徊し、村童乞_レ餅」とある。

ここに出てくる「鬼面」に「ハツブロ」と送り仮名をつけてあり、「ハツブロ」について次のように説明してある。「九、十月の頃、村々童共種をろし祭とて、竹の皮を以て、なりに鬼面をこしらへ、村中家ごとに入、種をろし餅を乞走あるき、一所にその餅を集め煮て喰る也。」とある。

2 種蒔きについて

「種蒔遊」というのがあり、これは「ハツブロ」と言われ、ハツブロとは初種子の意味でほぼ九月末から一〇月初めの庚申に竹の皮で鬼面を拵えて行_う。この祭りは野米を栽培していた頃、種おろしの祭りでこの日に搗いた餅を「カネサル餅」と言う。この行事は徳之島を中心として大島の北部地方に限っていたようで、変装した男女兒が一軒一軒回って「カネサル餅」をもらい集めていた事が記されている。

「実施内容」

始めに今回実施調査した伊仙町大田布の例を述べ、その後、聞き取り調査を行った徳之島町尾母の餅貰いについて述べる。

伊仙町大田布は上組・中組・下組に分かれており、上組には「イッサンサン之碑」が建っている。この碑の前に夕方になると三つの組の人々がイッサンボ（案山子様の人形）とおみやげを入れる竹籠（ティルという）、チヂン（太鼓）を持って集まってくる。

以前は、子どもたちを中心に各家々を回っていたが、現在は子ども数も少なくなつたために大人も一緒に回るようになった。

先頭にイッサンボという案山子様の人形を福の神（豊作の神）に見立て、その後を「ティル」を担いだ二人の子どもが続く。チヂンも二人の子どもが上手に叩き、住民と一緒に唄を歌いながら「イッサンサン之碑」の所まで歩く。

1 「イッサンサン之碑」の前で奉納

「イッサンサン之碑」の少し下の広場から碑の所まで唄を歌いながら行き、全員で一礼し「イッサンサン」の唄と踊りを奉納する。この後、二つの集落に分かれて家々を回る（写真1）。

イッサンサン（豊年祭）の唄

門口に近づいたら歌う唄

門口ぬ唄や 無礼ながら有（や）すがよ

物（むぬ）知らぬ吾達（わきや）や 許（ゆる）ち給（たぼ）れ

アラ ドンドンサマイトサンセ どっこい

家の庭で歌う唄

イッサンサンぬ 申（さん）ぬ年（とうせー）が 果報年

米倉（くうめぐら）んまよって来る

栗倉（あわぐら）んまよって来る

来年（やーに）の稲（いに）がな はし 生まれいなはいき

餅（むち）給（たぼ）れ 給れ 団子（だぐ）給れ 給れ

給(たば)らだてからー はや手輕(てが)るせーりゅんど
酒(さけ)欲(ふ)しやんま あらずい

料理(しゅうけ)欲(ふ)しやんま あらずい

昔 親(うや)祖先(ふっしゅ) うが しゅたるしゅんまね
家を出るとき歌う唄

此処(くま)ぬ父(あじや)と 母(あま)や 餅貰(むちむろ)
おぼらよ

来年(やーに)の稻(いに)がなし 蛙枕(あぶしまくら)
アラ ドンドンサマイトサンセ どっこい

このようにその場に応じた唄を歌いながら踊る。家の庭で歌う唄は繰り返して歌い踊る。イッサンボを持つて前後左右に踊る子どもは、イッサンボの中に入って踊り続けるので体力がないと最後まで続かないが、頑張つて踊り歌っている。大人がイッサンボを持つところは、中に入らないで持つて踊るが、とても重く(一〇キログラム位ある。)持ち歩くだけでも大変であるが、唄に合わせてイッサンボを左右上下に動かすので、こちらでも体力を必要とする。

イッサンボは上組の一つ、中組下組で一つある。それぞれの組で手作りするので特徴あるイッサンボが出来上がる。どちらも顔はワラと縄で形作り白い紙を貼つて顔を書く。頭には麦わら帽子を被せる。手は左右それぞれ五本の指を作る。大人の持つイッサンボも同じように作る。体は棒に藁と縄を巻きその上をゴザで巻き、その上から浴衣を着せる。高さはどちらもほぼ二メートル位で、両手を広げた幅はおよそ一・五メートルである(写真2)。

二 各家庭への訪問

福の神であるイッサンボを先頭にテイルを担いだ二人、チゼン、子どもや青年、大人たちがイッサンサンの唄を歌いながら、最初に回る家が決まっているので、その家に向かう。門が近づいてきたら「門口ぬ唄や・・・」の唄を歌いながら庭に入り縁側の所で「イ

ッサンサンぬ 申ぬ年が 果報年・・・」の唄を歌う(写真3)。
この歌を繰り返して歌ううちにその家の主人が出てきて御神酒をイッサンサンにかけてくれる(写真4)。大人の場合はその御神酒をいただく。続いておみやげの餅(カシヤ餅と言ひ、米粉と小豆を混ぜ丸めてカシヤと呼ばれる月桃の葉に包んで蒸した団子)やお菓子などをテイルに入れてもらう。参加している人々皆にジュースや焼酎、お菓子などのもてなしがある。

もてなしを受け帰るときには「此処ぬ父と 母や 餅貰ち・・・」という唄を歌いながら帰る。

このような踊りと歌を各家庭を訪問するたびに繰り返す。

集落の各家庭を回り終わったら公民館に帰り、貰つて来たおみやげを分けてもらい解散となる。今年は平日であったため、また途中から雨が降ってきたので早めに終わった。

徳之島町尾母の例

「秋餅(アキムチ)」と言ひ、豊作祈願である。秋の彼岸の中で青年たちが日程を決める。

中心となる場所は集落内にある溝川(じょうご)神社で、ここで御神酒いただいて夜七時頃出発する。子どもたちは青年団と一緒に竹で作った松明を持つ。青年団が「イッサンボ」と言う案山子様の人形を持つ。このイッサンボは伊仙町犬田布のものとほぼ同じであるが、手に白手袋を付けている。

辻々でチゼンを叩いて「ドンドン節」の唄を歌い踊る。この「ドンドン節」は一三番まであるが、少しだけ紹介する。

歌い始めは次のようにエト(干支)から入る。今年(二〇一七)は酉年であるから干支の所に酉が入る。

いっさんがさーん (干支) ぬ年や かあうどうし
家入り前(家の中に入るとき)

門口(むんぐち)の唄や 無礼(ぶり)ながらやしがよ
吾達(わつきや)がしゆる事(くとう)や 許ち給(たば)れ

家の中で

今日(きゆう)のふうくらしいや 何時(いち)ゆうりも 勝

(まさ)ていよ

何時(いち)ま今日(きゆう)のぐうとうく あらちたばれ

と歌い家の中をう二回位回り外へ出る。家の中で歌い踊るのは大人たちで、子どもは外で待っている。辻々では次の唄を歌う。

むちむろせもろせ だぐむち もろせよ
もろさだていからや ていがらせるんど

このようにして家々を回り、辻々で歌い踊って、貰った餅は溝川神社の境内から下の広場に投げる。集まった人々は先を競って餅を拾う。

同町手々では「ムチタボリ」と言い、白い布で顔を隠し左手に紅白の棒を右手に扇を持った男性と浴衣を着て顔に紅白の布を被った女性が、チデンと三味線に合わせて踊りながら集落内を廻り豊稔祈願をし餅を貰う。

天城町

天城町では「餅タボレ」と言い、西阿木名地区と兼久地区で旧暦八月一五日頃、各家庭を回り「餅貰い行事」を行っている。西阿木名小中学校では長老たちのチデンと唄に合わせて「餅貰れ唄」の唄と踊りを練習していた。

【意義考察】

イッサンサンの由来は「イッサンサン之碑」に書いてあることも古老の言い伝えとして大切である。しかし、このことについて、新里氏が『先史学・考古学論究VI』で『南島雑話』に出てくる「ハツブロ」と奄美の稲作儀礼である「種おろし」、「種蒔き」に伴う豊作祈願の「餅貰い」行事を文献から読み解いている。

【参考文献】

- ・鹿児島県教育庁文化課 一九九二 『鹿児島県の民俗芸能―民俗芸能緊急調査報告書―』 鹿児島県教育委員会
- ・名越左源太 国分直一・恵良宏校註 一九八四 『南島雑話二』 平凡社
- ・新里亮人 二〇一四 「穀物生産をめぐる考古学と民族学」『先史学・考古学論究VI』 龍田考古会

(牧島 知子)



写真3 門の近くで歌う子どもたち



写真1 イッサンサンの碑の前で奉納



写真4 イッサンボにお神酒をあげる



写真2 イッサンボ

37

あじにつちえーじんじゃ
按司根栄神社のシヌグ祭り

〔別 名〕なし

〔伝 承 地〕大島郡与論町朝戸地区

〔実施時期〕九月七日

〔実施場所〕按司根栄神社から集落内聖地の巡回

〔伝承組織〕按司根栄神社及び朝戸集落住民

〔名称〕

シヌグあるいはシニグと称される。シヌグには「稲供」が当てられる。

〔行事概要〕

稲の祭りであり、按司根栄神社（写真1）前の辻の広場にサークラと称される組合が集合し、旗を持って集落内のハタタテイシ（旗立て石）がある聖地を巡回し、農業の神様を祀り豊年・豊作を祈願する行事とされる。所要所での弓矢で射って、その正中を射止めると豊作が約束されるという。この弓には、厄払いの意味もあるとされる。行事に弓を使う理由は、後に述べる按司根栄の伝説に関わるとされている。

〔実施時期〕

二〇一七年は、旧暦の七月一六日にあたる新暦の九月七日に行われた。二年に一度の開催とされる。

〔伝承組織〕

二〇一七年は二八世帯の家々の参加があった。朝戸集落は、古くからの組として、按司根栄神社が位置するニツチエーサークラと、サトヌシサークラ、フカナサークラという三組があり、それぞれか



朝戸地区周辺



写真1 按司根栄神社

らザムツ（座元）が一軒ずつ出る。これにウツコウサークラ（西区ともされる。）が加わって行われた。ニツチエーサークラは旗を担当し、サトヌシサークラは三味線と太鼓の楽を担当し、フカナサークラは弓と弓矢の準備を担当するが、フカナサークラは三回前のシニグから個別のサークラとしてはなっていない。

・現況

当日の午前八時頃から準備を始める。按司根栄神社横の空き地にテントを立て、祭祀を行う場所を作る。また、神様の通る道の竹笹や草を刈り、掃除をしておく。

午前十一時半頃から、シヌグの旗を作る。シヌグの旗は、竹を十字に組み合わせ、その先に笹を差し込み、先を切りそろえ、白いサラシを巻き付けた、長さ三メートルほどのものである（写真2）。この旗を持つハタモチの家は村田家とされている（現在は、別姓の家に引き継がれている）。ハタモチの村田家は、按司根栄神社の氏子の中心であり、まとめ役ともされるが、現在別の家に替わっている。

午後一時頃から、按司根栄神社宮司市来家に人々が集まって来る。参加の会費は三〇〇円であるが、それぞれの気持ちで寄付を行い、酒や米も持ち寄られる。女性達は、料理を作り、男性達は、会場のテントの骨組みにブルーシートを敷いたり、行事に用いる笹、道を祓うのに用いるデークの葉を纏めたものを運んだりする。



写真2 シヌグの旗

午後一時三〇分頃旗が持ち出され、テントの柱に寄せて立てられ、その根本にはその年収穫された稲が、泥を落とした根と稲穂が着いたまま逆さに結び付けられる（写真3）。稲は、神社の氏子で稲作を行っている者から奉納されるが、七月には刈り始め八月には刈り

終わっているもので、十分に乾燥したものが用いられる。その下にはサラシで覆った台が置かれ、修祓に用いる榊やシロミキ（新米を石臼で挽いて細かな粉にし、それを水で溶いたもの。（写真4）やクロミキ（焼酎）をいただく杯、小皿の塩と潮水を入れた青磁の器に榊を乗せた三宝などが置かれる。

午後一時四十五分頃、宮司家の女性が三客の椀にミキを注ぎ、それを四角の盆に乗せて、按司根栄神社の神殿前に供える。また、テントにもミキを頂くための椀が多数用意される。午後二時頃、宮司により神社神殿で神事が執り行われる。こちらには、集落の住民は参加せず、宮司のみの神事となる。続いて宮司は、会場に移り、そこで神事を執り行う（写真5）。修祓・献饌・祝詞奏上・御神酒上げと神式の手順で進められる。御神酒は、焼酎とミキとが用いられ、ミキが大きな杯に満たされて供えられる。神事後、全員が椀でミキを頂き、また焼酎を椀で頂く。暫く談笑した後、午後二時四〇分頃出発する。

テントの前、三叉路の中央で、ハタモチと氏子総代、宮司の三人が旗の根本を地面に着けて垂直に立て、その三人をデークの葉の束を手にした三人の大人達が一人の子どもを交えて「ウーバーハーバー」と大声で唱えながら、反時計回りに



写真5 宮司による神事



写真4 シロミキ



写真3 旗と稲穂

三周する（写真6）。それが終わると次の場所に移動する。

午後二時四五分頃、集落内の道を通って、フルサト地区側の畑に出て、更に崖に面した場所に至る。ハタタティシ周辺の草は刈り払われており、そこに同じく三人が旗を立てて、三人が反時計回りにデークの葉で叩いて回る。

その後、旗をより高い場所に移し、宮司はハタタティシに焼酎一合瓶二本を供え祝詞を奏上し（写真7）、御神酒上げを行う。その後出立する。

午後二時五三分頃、集落蕎麦の三叉路で、旗を立て、同じ儀礼を行う。

午後三時頃、ウツコウのゲートボール場のハタタティシの場所に到着する。旗を石に立て掛け、広場にブルーシートを敷いて準備を行う。シヌグに参加する人々が、この場所に徐々に集まって来る。それぞれは、「二重一瓶」で、酒や煮染め、ゆで卵、焼き魚などの料理、菓子パンやおにぎり、ミカンなど思い思いのものを用意して来ている。

午後三時四五分頃から、ハタタティシの前で宮司が神事を執り行う（写真8）。御神酒を供えた後、座元三人と共に拝礼し、全員で柏手を打つ。神で修祓を行い、祝詞を奏上する。今回の



写真6 旗を立てて巡行する



写真7 ハタタティシでの神事



写真8 ウツコウの公民館前での神事

シヌグで奏上されたのは新しい祝詞である。今ひとつ古い祝詞も神社には継承されており、そちらは後半に資料として掲載する。その後、再び柏手を打ち、献饌を行う。神事の後、直会となり、持ち寄った酒と料理を頂きながら談笑する。その場で三味線が弾かれ、踊りが自然と踊られ、唄も始まる。市来家の女性がユークイを披露し全員が楽しむ（写真9）。

午後五時二〇分頃、直会は終わり、出立するが、その際に、広場から道路に出る門で座元が手にした的を宮司が弓矢で射通す。ごく近くから射る為、的の中心に矢が当たり、これで豊作になると皆喜ぶ（写真10）。

行列は海岸方向に向かって進む（写真11）。途中、道が四つ辻となる場所二か所で、旗を立て、デークの葉で打ち払う儀礼を行う（写真12）。また、二番目の四つ辻では、座元の一人が的を矢で射る。



写真9 直会で踊る



写真10 的を弓矢で射る



写真11 旗を運ぶ

午後五時三十分頃、行列は、海が望めるクボサトの岡にあるハタタテイシに到着する。幅が一・五メートル、高さ一メートルほどある石灰岩のハタタテイシの横に旗を立て、石の上には的とデークの葉を置いて納める（写真13）。宮司と座元一名が跪いて祈りを捧げる（写真14）。他の者達も頭を下げて拝礼する。この後、按司根栄神社への帰途に着く。



写真12 辻で旗を立てる

午後六時頃、神社前へ到着する。神社横に石灰岩の巨岩が塚状になった森がある。宮司は、旗の先に挿していた笹束の一つを手にも、そこに登る。樹木に包まれた岩の洞に笹を納め拝礼し、柏手を打って、祀り納めとなる（写真15）。その後、テントで直会となり、夜遅くまで談笑する。

「由来伝承」

按司根栄神社では以下の由来が伝えられている。

今から八〇〇年ほど前の話である。ヌル（島のノロ）が屋敷裏で農作業をしていた。疲れて神社の下で休憩して眠ってしまった。その時、髭のある外国人のような男性の夢を見て、身籠もった。子どもは、生まれた時から歯も生えており、髪も黒く、これは「鬼の子」だと恐れた家族が土の中に埋めてしまった。何日後、土の中から赤ん坊の泣き声が聞こえ、その場所が光り始めた。掘り起こすと、六・七歳の少年の姿があり、これは神からの授かり物と家族も思い直し、ヌルは、子どもを大切に育てた。少年には父



写真13 祭具を納める

親が居なかったのも、ヌルの兄であるキヤラドウキが農業に励んで少年とヌルを食べさせた。少年は成長して、馬術も弓術も上手な青年となり、結婚し、子どもも設けた。青年にはミンジュルキ（水留貴）姫という妹も生まれ、彼女は島一番の弓の名手となった。その名声が琉球王の下にも届き、琉球王は青年を城に呼んで、その実力を試すことにした。青年を城外に追い出し、城を警備の兵で固め、今から五分以内に城内に忍び込んだらその実力を認めると告げた。青年は五分を待たずに城内に忍び込み、その力を示した。琉球王は、力を認め、部下とすることにしたが、当時、青年はヤーナー（幼名）しか持たず名が無かった。王は、根栄（ニツチェ）という村から来たので、根



写真15 宮司による祀り納め

栄（ニツチェ）という名を与え、青年はアジニツチェ（按司根栄）と呼ばれ、与論を離れ城中で働くこととなった。妹は形見に大事な弓を青年へ渡した。城内では王に忠誠を尽くしたが、与論には妻と子供や妹を残して来ており、望郷の念を募らせた。与論に帰らせて貰えるよう王に懇願したが、王はアジニツチェをなかなか帰そうとしなかった。アジニツチェは、王に形見の品として妹から貰った大事な弓を渡し、これを今一度受け取る為に必ず戻ることを約束し、



写真14 祈りを捧げる

ようやく与論に帰ることができた。アジニツチェが与論に帰ったことを皆喜んだが、妹が形見として渡した弓がないことに気づき怒ってしまった。アジニツチェは、お詫びとして強い桑の木を使って妹に渡し、その気持ちをなだめようとしたが、妹は聞かず、アジニツチェは、自ら琉球王の城に忍び込んで妹の弓を盗み出し、それを妹に渡した。弓がなくなったことに気づいた琉球王は、このようなことが出来るのはアジニツチェ以外には居ないと気づき、アジニツチェを倒してこいと千人の兵を与論へ送った。兵達が与論に到着した時、アジニツチェはその時、船倉海岸の沖で釣りをしていたが、里の使いの者から伝書鳩が送られ、敵が近づいていることを知った。アジニツチェは、急いで船を陸に着けると、食事を取ろうとしたが、子どもが飯にふざけて箸を突き立てたので、それを叱って、馬に乗って戦に出た。敵は茶花の海岸から上陸し、朝戸へと続くピヤヌーパンタの坂道を登って来た。アジニツチェは、刀を振りかざして襲いかかり一〇〇〇人の敵を全て倒した。そして、船に残っていた飯炊きの老人に、これ以上与論に近づくなど王に告げると命引き返そうと後ろを向いた。その時、飯炊きの老人は、アジニツチェに弓を射かけ、矢は彼の頭に突き刺さって殺されてしまった。飯炊きは自分の手柄だと喜んで、琉球に勇んで戻り、琉球王に伝えたが、お前にアジニツチェが倒せる訳がないと信じて貰えなかった。与論では、アジニツチェを失い悲しみにくれたが、また琉球王が一〇〇〇人の兵を送って来るかも知れないと考え、アジニツチェの遺体をいかにも生きている様に立たせ、琉球の方向を睨み付ける姿をとらせた。思った通り、琉球王は一〇〇〇人の兵を再び船で送ったが、海岸で兵を睨み付けるアジニツチェを見て、兵達は恐れを成して海に飛び込んで逃げようとし、そのまま溺れて死んでしまった。このことからアジニツチェは、「生きて一〇〇〇人、死んで一〇〇〇人」敵兵を倒したと伝えられるようになった。琉球王は、これにも懲りず更に一〇〇〇人の兵を送り込んだが、アジニツチェの妹のミンジュルキ姫が彼の代わりに勇敢に戦った。最後は、敵兵に捕らえられ、

首をはねられたが、その首は、一〇〇〇人の兵は嵐で琉球には帰れないとの呪いの言葉を告げ、その言葉通り、全ての兵が海の藻屑と消えた。死んだミンジュルキ姫は、このことから海の神として祀られることとなった。ミンジュルキ姫は、アジニツチェの妻であったが、それが知れると、子どもまで根絶やしにされる恐れがあったため、妹を名乗ったとする話もある。アジニツチェが幼い時、母のヌルと彼を農業で養ったヌルの兄であるキヤーラドゥキは農業の神様として祀られることとなった。アジニツチェを源為朝の子孫であるとする話もある。

以上は、按司根栄神社の由来伝承でもあるが、シヌグ祭りであつて奏上された祝詞内容を神社よりご提供いただいた先代宮司のノートより記述する。

シネグニツチェーサークラ祝詞

御トツトウガナシヌンス島の初めニイ地カテオウリンシャーチ世初めんシャーチタバーチャル根地の大神様ガナシノイエーチキンサーチタバーチャル中（ウチ）からアラビトグサヌ一番心信シ祭りバドナイサー五コクノ祭で、五コク初メ四ツ足守テ風（フー）キバナシキ各屋（カクヤーヤー）のアクマサイヤク清め払（ハ）レールマツリゴトエークトチチ、祭りヌ年月日ト式（シキ）の方法第一ニ稲（マイ）のプーカザテ白ミキクロミキノナエテフマヌユニワヌアムトイヲブサダミテサークラ造テウシヌ年ヌ七月十七日ン祭りハジメテカラ三年目、モールシツラヲガンスルフトイエーチキンサーチタバーチアルタメウヌアト神様ガナシヌクワマガダイダイヌチアラの神様方のイエーチキンサーチャルトホリツラヲガシ農作ニ熱心シデキサカエラチ四ツ足テガネームヌ大事シ盛（サカン）ナチバーチャルタメ地荒の神等ヤ後ヌ世ヌ農作物と四ツ足ヌ守り神様チチアガミトウトデヲヤビユーシツラウミーマブイシタバーチミツシークアリガタサヤビユーシ今年は何年七月十七日ナヤビテフマヌウフシツユムールガ待（マ）チカンテ昔ナガラ相揃ふてツララガンシャー

ビユクトアメツチノウ神様ガタ五コクノ神様フーインシャーチ大根地の神様地荒の神々按司ンチエ水ルキヌ神様ツラウケトイシンミーガチマーチウマンツノミーニヌウイツラウミーマブイドクサフパサアラチ、チクイムヂク年（？）虫ヂキハデマイピヤイマイアラシンサンガネーシ、石ヌミ、ハニヌミイリラチ、テガネーヌ、ヌビスカヒアシズーク、ヌチーズク、アラチヤーウチワラビンチャヌウチパーレルデークヌ音勇マシク、イカメシク、マヂムヌ、アクリヨウ災（サイ）ヤク。ノコサズ落（オト）サズウチパローサチタバーチイヤンツヌ今（キユ）日ンターナツラウミーマブイシ、ユカユガプーサズキンシャーチワーチャガ根津栄サークラヤマスマスサカエラチベンシャーリ、アートツトウトガナシー

今回のシヌグ祭りでは、奏上された祝詞も基本的に前述の祝詞と共通する。祝詞では、与論島に天降り世創した「根地の大神」の教えにより、人々が信心を一番として志し、五穀祭として五穀、四つ足の守り、風邪や各家々の悪魔災厄の清め祓いの祭事として、サークラを造り、第一に稲の穂を飾り、白ミキ、黒ミキを供えて丑年の七月一七日に祀り始めたものとされている。祝詞に現れる「雨土の神様」、「五穀豊穡の神様」、「按司根栄」、「水留貴神」としては、「根地の大神」、「地荒の神様」、「農業の神様」などである。創世神、土地神、雨の神、農耕神などと論の天地の創世と、そこにおける農耕に関わる神々と、先に述べた神話に関わる按司根栄と水留貴神という兄妹神であり、神話的世界とシヌグ祭りとの対応を指摘出来る。

【意義】

朝戸地区で行われているシヌグは、男性が中心となって行われる稲作儀礼であり、基本的には収穫を終えた後の刈り上げの儀礼にある。旗には収穫された借り上げの稲束が下げられ、新米を石臼で

粉とし水に溶いたものをシロミキとして捧げるなど、収穫儀礼としての意味を示している。同時に、旗を中心に、集落の境界に位置する磐座を伴う聖地や、四つ辻、門などで、旗を中心として回りながら、笹の束で打ち払う儀礼が繰り返され、また、的を弓矢で射貫くなど、祓いを行うための鎮送儀礼としての意味も有している。加えて、按司根栄神社の由緒ともなっているアジニツチエとミンジュルキ姫を主人公とした、琉球王国と与論島の戦についての神話的伝承や「根地の大神」に関わる創世神話とその背景として結び付けられており、沖縄と近接した与論島の地理的・歴史的環境と対応した住民の民俗的歴史観を示す行事ともなっている。現代においても、観光資源化されることなく、あくまで住民のために神社を中心として行われており、南西諸島における稲作儀礼を考える上で民俗学的に極めて貴重なものであると考えられる。

【参考文献】

「シネグニツチエサークラ祝詞」（按司根栄神社宮司提供）

（徳丸 亜木）

38

ゆい ほうねんおど
油井の豊年踊り

〔別 名〕なし

〔伝 承 地〕大島郡瀬戸内町油井

〔実施時期〕旧暦八月一五日

〔実施場所〕瀬戸内町油井集落公民館前

〔伝承組織〕油井集落（代表者は区長）

〔名称〕

「油井の豊年踊り」は鹿児島県無形民俗文化財として昭和五八年に指定された時の名称である。

〔実施場所〕

大島郡瀬戸内町油井集落の油井小中学校隣接地にある公民館前広場。敷地内にはイビ（ベ）ガナシが祀られている。古くは、この敷地内は聖地でアシャゲとトネヤが建っていたが、現在アシャゲだけが建っている。

〔実施時期〕

毎年旧暦八月一五日で、雨でも学校の体育館で行われる。現在も平日であっても、この日を変えることはない。本番は午後二時から五時過ぎ頃まで、当日は敬老の日でもあるので、敬老会も一緒に行われる。

〔伝承組織〕

油井集落区長が代表を務め、油井集落民全員参加で行われる。旧暦八月一五日と決まった日に行われるので平日の場合がある。



油井集落周辺



米つき

平日の場合は油井小中学校も午前授業で、午後からは「油井豊年踊り」行事への参加となる。また、油井集落出身者で集落以外に住んでいる人や県外へ出ている人も含めて都合の付く限り、仕事も休みをもらい参加する。本年も関東地方から帰省し参加していた。

〔由来・伝承〕

特に伝承や古い文献などもなく不明である。

集落の守り神である「イビ（べ）ガナシ」を祀ってあるミヤー（聖地）で、十五夜行事の綱引き、相撲、豊作を感謝し五穀豊穡を祈る農耕儀礼などが一緒に行われる。この日は敬老会も一緒に行われる。

また、この会場の川を挟んだ所にイブシロシンオウ（ユブシロシンヌヒヤー）が祀られている場所がある。この方は力持ちで人徳があり、集落民から慕われ、勝負に強いと伝えられていることから、この油井の豊年踊りのときは、十五夜綱引きの勝負安全を祈願し、線香、花、力飯、お神酒などが供えられる。十五夜行事と豊年祝いと一緒に行われるのは珍しい。

〔実施内容〕

豊年踊りの準備の前に清めの塩と盃が関係者に渡される。

午前中、男性は広場にある大きなアコウの木を利用して昔からの方法で十五夜綱引きで使用する綱練りをする。豊年踊りで使用する道具類の準備や女性を中心に力めし作りも同時に行われる。

本番は午後二時から午後五時過ぎまでである。

実施の順番・内容は平成二八年八月一五日のプログラムによると、



写真1 綱引き

次のとおりである。

先払いにあたる「綱引き」の後、開会式、振り出し、前相撲、小中学生踊り、小中学生相撲、稲刈り、稲すり、米つき、力めし、初土俵、ヒギフツシユ（観音翁の土俵見回り）、青壮年相撲、親子兄弟相撲、チクテン、玉露かな、ガットドン、結び相撲、打ち止めの順で打ち止めに引き続き八月踊りとなる。

一般的にシキホウ（式法と言う字をあてている。）と言われる神事儀礼がある。これは、「土俵払い」から「観音翁の土俵見回り（い）」までを言う。力めしはシキホウには入らない。

1 綱引き（綱切り）

十五夜綱引き行事で、出演者はホラ貝を吹き合図をする人、綱を引く人々、囃子と踊り連、先払い役（模型の鎌二丁を持つ）、綱切り役（シシの格好をしている。）である。

綱はホラ貝の合図で東へ西へとチヂンの音にあわせて歩く。綱を東と西で引き合うことはない。そこへ帽子を被り面を付け、袖に模様のある白い上下の服を着、素足で模型の鎌二丁を持った先払いが出て来、綱の中央に左足をかけ鎌を振り下ろし綱を切る動作をしているところ、頭にシユロを被り面を付け、身体にシユロやクバの蓑をまとったシシが現れ、綱を素早く切る（写真1）。切られた綱は引き手によってこれもまた素早く結ばれ、何事もなかったかのように再び東へ西へと綱を持って歩く。そこへまた先払い続いてシシが現れ綱を切る、そして結ぶ。この動作を三回繰り返し、三回目に切られた綱の半分は相撲の土俵作りに使われる。土俵の近くでは踊り手がチヂンの音に合わせて踊り応援をしている。

2 土俵払い

チヂンの音や歌い手に合わせて笠と面を被り、白い上下に赤い袖、赤い帯姿で両手に鎌を持った男性が現れ土俵の中の悪を鎌で払い、土俵上の行事が無事終わるよう踊る（写真2）。

3 稲刈り

豊作を喜び、田んぼで稲を刈り、束ねて担ぐという稲刈りの所作をする。クバガサを被り腰に藁縄を締めた農作業着の男性が、囃子に合わせて稲刈りをし、担い棒で運ぶまでの様子を演じる。

4 稲摺り

この演技は土俵の下（脇）で行われる。

奄美で使われていた木のスリウスで稲を摺り米にする様子を表現する。一人がスリウス役、二人がスリウスを回す役、あと二人が選別する役という五人で作業の様子を演じる。



写真2 土俵払い

スリウス役は笠を被り派手な衣装で、スリウスを回す役の二人に合わせて体を左右に半回転させる。スリウスを回転させる役の二人は、頭に手拭いを被り紺の着物に赤の腰巻姿で、両手に持つている赤い長い布を引き合う。摺り役と同じ服装の二人はユリという竹製の道具を使い、スリウスから出てきた玄米とノギやもみ殻などを振り分ける作業を演じている。

5 米つき

スリウスで摺った米を土俵をウスに見立てて、土俵上で搗く様子を演じる。

肩に手拭いを掛けた青年達が、「振り出し」と同様に土俵上に上がり円陣を組み、肩の手拭いを取りハチマキに締める。歌にあわせて片膝ついて左手を上にあげ、片手を曲げ天を仰ぐような姿をし、続いて肩肘で土俵を突くように力をこめる。この動作を繰り返し、最後は力士たちが手踊りしながら退場する。

このような「稲刈り」、「稲すり」、「米搗き」という農作業関連のものは「シキホウ（式法）」と呼称されている。

6 力飯（力飯運び）

採れたての新米を手造りカマドにサンメナベという平鍋を据え置き、この中で炊き、力飯（おにぎり）を作る。力飯にはサンダンカの花を一輪ずつ挿す。

力飯は竹製サンバラに入れ、土俵の下に婦人たちが肩の高さに捧げ持って来、土俵上の力士に土俵の下から渡す。力士はサンバラに入った力飯を受け取り、頭の上に両手で上げ下げしながら踊り、また、婦人たちに渡す。受け取った婦人たちは力士、来賓参列者、集落民、観客など全員に配り食べてもらう。これは、豊作をみんなと一緒に喜び分かち合い感謝の意を表している。また、これはイッソと呼ばれ変装などした若い女性が握り飯などの入ったカゴを花で飾って現れ、力士や見物客に振る舞う行事である。

7 初土俵

この一年間に生まれた子どもが力士に抱かれ土俵入りする。子どもは健康、成長を祝う。

8 ヒギフツシュ

観音公の土俵見回りとか観音翁の土俵見舞いとも言われている。

観音様が道化役と弁当持ちのお供二人を連れ、村人たちの豊かで楽しい祭りを見ながら土俵を見回っているうちに、道化役が観音様の行く先々でいたずらをするので、観音様が懲らしめる様子を演じている。

9 青壮年相撲

青壮年による相撲大会では、県外に出ている人も帰省し、相撲をとり豊年踊りに参加している。

10 親子兄弟相撲

親子・兄弟で楽しく相撲をとる。島外に出ている兄弟なども帰省し、豊年踊りのひとときを楽しんでいる。この参加者も貴重な継承者となっている。

11 チクテン

青年団男女による棒踊り。棒は紅白で巻いてあり、両端に白い房が付いている。

12 玉露カナ
たまつゆ

遊び好きの親不孝な娘玉露カナが恋人と遊んでいるところへ暴れシシが一匹現れ、襲いかかり暴れまわるところへ勇気ある恋人が長鎌でシシを退治するという演技でシシは観客の周りでも暴れまわる。

13 ガットドン

上方から入った芸能で、盲目の祭り好きのガットドンが一人で祭りに行き、酒を飲み三味線を弾き、踊ったり歌ったりするうちに、お腹の調子が悪くなり客の前で用を足す、というユーモアたっぷりの芸能である。

14 結び相撲

祭り最後の相撲が行われる。

15 打ち止め

踊り連が土俵を取り囲むように輪を作り、チヂンの音に合わせて踊る。この中に二人の力士がススキを挿した大きな焼酎カメを担いで、土俵の下を一緒に回り、途中からこの焼酎カメを土俵上に担ぎあげ、土俵の真ん中に置き、再び踊りの輪に加わる。これは豊年踊りが無事終わり焼酎を飲み、みんな楽しく過ぎしカメの焼酎も空になったという感謝の気持ちを表現している。

16 八月踊り

打ち止めに続いて集落民、観客がチヂンの音に合わせて一斉に八月踊りがにぎやかに踊られる。チヂンの音もテンポが速くなり、指笛もあちこちから聞こえ、にぎやかな手踊りも終盤を迎え今年の豊年踊りも終わりを告げる。

イタシキバライ

イタシキバライ（イタシツバレともいう）と呼称されている反省会が、翌日集落民全員参加（都合のつく人）で行われる。

このイタシキバライが終わらないと「油井豊年踊り」は終わらないと言われている。

午前中料理を作り、後片付けをして、午後「油井豊年踊り」の反省会をする。この時の料理は五キログラムの米でおにぎりを作る。その他、刺身、盛り皿（天ぷらなど）、うどん（煮込みうどん。ジャコでダシをとり、島のつけあげ、ねぎなど）などである。

【意義・考察】

これまで見てきたように、十五夜行事と豊年踊りで演じられる芸能は、十五夜綱引きや相撲など五穀豊穡を祝い祈願するものと、シキホウと呼称される「土俵払い」から「観音翁土俵見回り」までのものがあり、これらは神事儀礼の意味があると言われている。

田植えに関する祭り・踊りは各地でみられるが、稲の収穫にまつわる祭りや踊りもこれほどしっかりと伝承している地域は少ないのではないだろうか。また、豊作を祝う祭りと十五夜行事と一緒に行うというのも珍しく貴重であると思う。

【参考文献】

- ・民族文化映像研究所編集 一九八三 「油井の豊年祭り」『鹿児島県文化財調査報告書第二九集』鹿児島県教育委員会
- ・『瀬戸内町誌（民俗編）』一九七七 瀬戸内町
- ・小野重朗 一九九四 『南日本の民俗文化VI 南島の祭り』第一書房
- ・『しまがたれ第三号』一九九七 しまがたれ同好会編発行
- ・中曽根幸市 一九七九 「油井の豊年祭（シバヤ）について」『まつり三三三』 まつり同好会発行

（牧島 知子）

39

かみひらかわ だいじゃおど
上平川の大蛇踊り

〔別 名〕なし

〔伝 承 地〕知名町上平川集落

〔実施時期〕不定期。九月一五日は一部実施

〔実施場所〕野外。上平川殿内神社

〔伝承組織〕上平川大蛇踊り保存会

〔名称〕

沖縄良部島知名町上平川集落に伝わる「大蛇踊り」は、沖縄の組踊り「執心鐘入」を取り入れたのではないかと言われている。「道成寺物」の演劇は、心変わりする男に対して嫉妬に狂う女心を表現する事を主題にしているのに対して、この「上平川大蛇踊り」は、「長さ一〇メートルにもなる大蛇が空中高く乱舞するところを見せ場になっているので、このような名称になったのであろう。

〔実施時期〕

藩政時代は、旧暦の八月一五日に、グムチ踊りとして（後述）行われていたようであるが、グムチ踊りが途絶えてからは、催し物等で特別に要請される時だけ集落からの出し物として踊られていた。現在は、「上平川大蛇踊り」を創作したと伝えられる幸山政考を祀る「殿内神社」の祭礼日（九月一五日）に、大蛇踊りの一部、（幽霊女役の踊り）が奉納されている。

〔伝承組織〕

大蛇踊り保存会が結成されている。保存会構成員は上平川集落の青壮年男女ほぼ全員（約五〇人）。



上平川集落周辺



大蛇踊り

「由来・伝承」

上平川の幸村政孝が、鹿児島に上国の帰路嵐に遭い明国に漂着し、明国で大蛇踊りを習い覚えた。数か年経過し、帰国するが、途中沖繩に立ち寄り、そこで琉球風に台詞や所作を直して楽劇に構成して上平川集落に伝えたもので、元禄一〇（一七九八）年頃から踊り始めたと言う。

幸村政孝を祀る殿内神社には「来心従遠居士、与人相勤上国

之砌鹿兒二而病死。元禄一二（一七〇〇）年卯九月十五日、檀方南林寺中本庵也。喜美留間切、与人先久間」と背部に刻銘のある木像が安置されている。これによると、島出身の役人であった幸村政孝は、再度上国したようで、元禄一二（一六九九）年九月二五日に鹿児島で死去し、鹿児島南林寺に葬られた。死骸は連れて帰れないので、沖永良部島喜美留村の与人（村長格島役人）である先久間なる人物が代わりの木像に霊を遷して持ち帰ったようである。



写真1 幸村政孝像

「実施内容」

1 あらすじ

ある寺の高僧が、諸国行脚の旅に出かけることになった。そこで寺の小僧たちを集めて「この寺は昔から女人禁制であるので、どんなことがあっても女人は寺に入れてはならぬ。」ときつく注意して出かけた。数日後の晩に、美しい女が訪ねて一夜の宿を乞う。小僧たちは「ならぬならぬ」と断るが、踊りをすることを条件にしてついに許す。娘の踊りを見ているうちに、睡魔に襲われ、小僧たちは寝てしまう。目を覚ました小僧たちが女を探していると、女が正体を現わし大蛇となつて襲いかかってくる。なすすべもなく小僧たちが

うろたえていると、ちょうど運よく高僧が帰つて来た。高僧は、小僧たちを叱咤激励してお経を唱えさせ、お経の力で大蛇を退治する。お経の有難さと、高僧の徳を称えて村人達は、総踊りをして喜び祝う。

2 台詞

台詞は、琉球方言のままなので、演ずる沖永良部の人たちには理解しにくい言葉もあるが、そのまま踏襲して守られている。台詞が省略されていると思われる箇所もかなりあるので、道成寺物語や、歌舞伎の京鹿子娘道成寺などの内容に通じていないと理解不明なところがある。しかし、自己流に解釈し台詞を変えることもなく上平川の人たちは、台詞を昔のままに伝えている。

筋書きの核心にあたる幽霊女役と小僧役の台詞を紹介する。

（1）幽霊女の台詞

或る晩に女が来て口上を述べる。
『ナマイジルワミヤ（今出てきた私は）、エーシダキヌ（エーシ岳の）、ユウリイヨ（幽霊である）、タマクガネサトガ（いとしい恋人が）イクトバヌアリ（祈りの言葉があつ



写真3 幽霊女の登場、踊りを舞う



写真2 高僧は坊主たちに注意して旅に出る

たなら)、サキユウヌハシ(左京の橋のことか、或いは三途の川にかかっている橋のことか不明)、ヒルク(広くて、ワタリグルシヤ(渡りにくい。あの世に成仏できないということか不明)』

(2) 小僧の台詞

睡魔に襲われて寝てしまった小僧たちは目が覚めて騒動する。『イヤークマウツタ、オナグヤ、マーイツタカ(あれ、ここにいた女は、どこに行ったのか)、クンカニヌシャチ(この鐘の下に、蛇収納籠を鐘と形容して言う)、ウンナガゴロエーゴロエー(女がゴロゴロといびきをかいて寝ているぞ)』

小僧たちが探索し騒動していると、女は大蛇に化けて空中高く乱舞し襲い掛かってくる。そこへ運よく和尚さんが帰ってきた。和尚の指導により皆で一心にお経(真言)を唱え、大蛇を退治する。それから村人全員の総踊りとなる。



写真4 イマオウ

3 登場人物と舞台装置

(1) 「登場人物」

- ・幽霊女
- ・和尚(僧侶の袈裟懸けの服装ではなく、旅装束の男性)
- ・小僧(お寺の小僧さんの恰好ではなく、下男風衣装の男六人)
- ・イマオウ(道化役。仮面神。四角形の板状の面で、赤、緑、黄色の線で隈取りがされており、恐ろしい形相ながら華やかさを醸し出している。髪、鼻、顎の毛はシユロ。両頬に緑に囲まれた大きな赤色の丸が描かれている。)
- ・ミンギョウ(白装束、仏像人形のような恰好をしている。仏像の

化身のようだ。槍を持っており、大蛇を突き刺したりして退治する。上平川集落のことを沖永良部ではヒョウと言う。他集落からヒョウミンギョウとからかわれたりしたので、そのようなものを出す必要はないと言う人達もあり、このミンギョウを大蛇踊りから外していた時もある。)

- ① 囃子方(三味線、太鼓、歌四六人)
- ② 大蛇操り(男四人)
- ③ 総踊り(男女五〇人程)



写真5 ミンギョウ

(2) 「大蛇と舞台装置」

① 大蛇(頭は、デイゴの木で作り、顎を開けて火を吹くようになっている。口の中に入れた発煙筒で発火させる。胴体は、竹ひご輪を百個ほど繋ぎ、それに布巻き、その上に和紙を張ってうろこの模様を彩色する。長さは一〇メートルなり、製作に約一月ほどかかる。)

② ヤグラ仕立て(大蛇は、頭、胴体、尻尾の三か所をそれぞれ綱で結び、一方の綱は、ヤグラに立て掛けた杉の丸太二つけた滑車にされるので、それを引くと大蛇は宙に浮くようになる。)

③ 蛇籠(蛇を入れる籠をジャバギと言う。ヤグラに取り付けた大蛇はあらかじめ尻尾からジャバギに収めておく。大蛇踊りではこの蛇籠に大蛇が入る事を「鐘に隠れた」と形容している。)

(3) 「沖永良部島の村踊り」

沖永良部島では、江戸時代後期の安政時代頃から、赴任してきた役人たちを慰めるために、旧暦八月十五夜の日に、各村から余興の

出し物の踊りが課せられるようになり、次第に強要されるようになった。これを沖永良部島では「ゴムチ踊り」と言う。ゴムチとは、沖永良部の言葉で貢物のことである。ゴムチ踊りは村々の競争するところとなり、各村では沖縄から踊りの師匠を招いて修得に務めるようになっていった。

その名残で、現在でも各村にその村独自の踊りが見られる。例えば、畦布と瀬利覚集落の「獅子舞」、久志検集落の「チンカラ踊り」、国頭集落の「竿打ち踊り」、永嶺集落の「収納米踊り」、西見地区（上城・下城・新城集落）の「イシシ袴踊り」などである。

上平川の「大蛇踊り」もこのようなゴムチ踊りの一つであり、集落間の競い合いが、このような大掛りな村踊りを成立させたのであろう。

【考察】

上平川大蛇踊りは、他の奄美の芸能などと違って、一貫した筋書きを持った劇仕立てになっているのが特徴である。舞台装置は大きくて大蛇が空中高く乱舞する場面は、この芸能の大きな見せ場になっており、このような大掛りな仕掛けは、歌舞伎の影響を受けているのかもしれない。

この踊りは、幸村政孝が、沖縄で構成したと伝えられるが、沖縄で組踊りの道成寺物の「執心鐘入」を取り入れたのではないかと言われている。内容的には女の情念を強調する「執心鐘入り」よりも、



写真 6 村人の総踊り

大蛇が空中高く舞う事や仏教の教えの有難さに等に重きが置

かれている点がやや違う。

「上平川大蛇踊り」は、長さ一〇メートルにもなる大蛇が空中高く乱舞するところがクライマックスである。

総勢五〇人もの大掛りな「村踊り」でこの芸能は終るが、大蛇退治の喜びを表すその踊りは、沖永良部島で「三十三忌祭」に墓まで霊を送る「念仏踊り」のようである。この踊りは琉球の「チョンダラー」系の踊りで、総踊りには琉球芸能の影響が窺える。

（出村 卓三）

- 〔別 名〕 ミハチガツ（三八月）
- 〔伝 承 地〕 大島郡宇検村阿室
- 〔実施時期〕 旧暦八月のアラセツの次の壬の日
- 〔実施場所〕 集落のミヤー及び各家庭
- 〔伝承組織〕 集落（公民館）

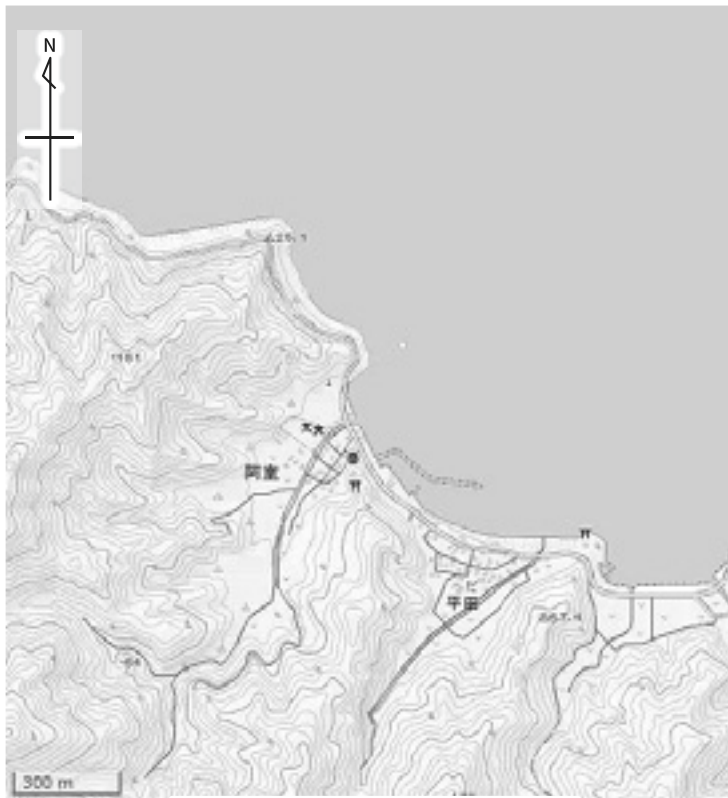
〔名称〕

「シバサシ」は、狭義には中心となる家の四隅の軒にススキの葉を挿すことを表し、広義にはミハチガツ行事の中のアラセツから数えて七日目の日に行われる一連の行事と、その一日のことをシバサシと呼んでいる。

シバサシは「柴挿し」である。「柴」は一般的な日本語では「小枝」を指し、特に付け木にするような小枝を言う。しかし『字通』によれば、「此に細小なるもの、尖ったものの意がある。」としており、シバサシに用いられるススキの葉は字義にならなっていると言える。さらに『字通』では、「柴」という字は「柴」に通じると言い、その「柴」の字は「柴を燎（や）いて煙をあげ、天を祀る祭儀を言う。」のだと言う。これは、シバサシの前日の夕方、藁をもやし力草で火を消し煙を出し、シバサシの神様、ご先祖様を天から下ろすことと通じている。

「シバサシ」と言う語は、国語辞典にも項目として立ててあり、『大辞泉』では「祭りの物忌みの際、その印として柴を挿すこと。また、祭場の標示あるいは祭場の境を示すために立てる柴」とあり、結界の印であることがわかる。これは、南西諸島のシバサシが家屋を結界することと通じている。

シバサシという名称は、固有の行事の名称であると同時に、シバを挿して結界を行う一般名詞でもある。



阿室集落周辺



屋根の角にシバを挿した例

〔実施場所〕

広義のシバサシは、シバサシ行事全体を指しており、その意味では安室集落のシバサシの実施場所は集落全体と言える。前日から当時刻にかけて、夜通し八月踊りを踊る場所はミヤー（庭）と呼ばれる場所である。狭義の個々のシバサシや着物を供えたりするのは、個々の家と言うことになる。

〔実施時期〕

平成二八年は九月一七日土曜日に行われた。この日は旧暦の八月一七日、ちょうど月遅れになっていた。干支は壬寅（みずのえとら）で十干では壬（みずのえ…水の兄）の日に当たる。

ミハチガツの最初の行事がアラセツ。アラセツは旧暦八月の最初の丙（ひのえ）の日に行われ、シバサシは、アラセツから七日目の壬（みずのえ）の日に行われる。ミハチガツの最後の行事ドンガはその後の甲子（きのえね）の日に行われる。

〔伝承組織〕

保存会など特別な組織はなく、集落単位で行われ、区長が中心となって行事を取り仕切る。また、シバサシギンを供えるのは、ノロの家や先祖にノロがいて、シバサシギン（シバサシ着物）を伝えている家で行われる。

〔由来・伝承〕

ミハチガチは、現在、奄美群島では一般に「三八月」と漢字で表記し、八月に行われるアラセツ、シバサシ、ドンガの三つの行事の意味だと考えられている。しかし、この一連の旧暦八月の行事の意味を考えると「ミ」は琉球方言で「新しい」を意味する「ミ」、あるいは「ミイ」、「ミー」だと考えられ、「新八月」と書き「ミハチガツ」と読むのが妥当だと思われる。

ミハチガツ行事は、かつては奄美群島各地で行われ、奄美大

島では、アラセツが旧暦八月の最初の丙（ひのえ）の日である。

この後、壬（みずのえ）の日のシバサシ、甲子（きのえね）の日のドンガとなる。喜界島では、旧暦八月の初丁（ひのと）を節折目（シチウンミ）、五日後をシバサシ、徳之島では、旧暦九月一〇日丁卯（ひのとう）または丁酉（ひのととり）をアラセツ、七日後をシバサシとしている。この間は、八月踊りがあるほか、家に先祖の霊を迎え、墓参りをするなど、先祖祭りの意味合いが強かった。そもそもは、生産暦の穀物、特に稲の収穫と播種との端境期にあたり、その時を新年としたと考えられる。

奄美群島は稲作が盛んではない印象があるが、これは島津藩に支配され、砂糖生産のためサトウキビがプランテーション化されたためで、それ以前は稲作が盛んに行われ、稲作の生産暦は人々の生活と密接な関係があった。

同様の行事は、沖縄県にもある。八重山列島の六、七月の己亥（つちのとい）の節（シツ）は、「年の夜」とも呼ばれる一年の区切りの行事で、「後生の正月（グソーノショウガチ）」とも言う。カヤを忌柴として家屋に刺すシバサシは沖縄諸島にもあり、やはり、この日を一年の終わりとし、「後生の正月」とする。

生産暦が本土とは異なる南西諸島の古い暦の感覚として、旧暦の八月に新年、すなわち一年の切れ目があるという考え方による行事である。

〔実施内容〕

かつては、アラセツからシバサシまでの七日間、八月踊りを踊り続けたと言う。この七日間は一年で最も悪い日とされ、すべての仕事を休み、結婚、新築、旅行、かまど造り、引越などを忌み嫌ったと言う。

その後、アラセツの前日から夜通し朝まで踊っていたが、現在では、アラセツの朝四時から踊るようになったと言う。調査者は、朝四時を目指して現地入りしたが、話によれば、前日に

も踊りをするので、夜通し踊る代わりに行っているという説明であった。

午前四時に着くとまだ人は集まっておらず、区長がスピーカーなど音響設備の点検をしていた。場所は公民館の前に土俵があり、その土俵の脇にアシヤゲと呼ばれる屋根と柱だけの建物がある。アシヤゲは奄美群島では集落毎にある神事を行う施設であるが、阿室集落のアシヤゲは鉄筋コンクリート製である。

しばらくすると、土俵の脇に作られた焚場で、集落の家々から集められた薪が燃やされ、焼酎と米と塩を供えた神事が行われる。

その後、ある程度人が集まるとおもむろに踊りが始まった。土俵の周りを輪になって踊る。後から来た人も適当な場所に入って踊り始める。

奄美大島の南部の八月踊りは、リズムが一定で、北部のようにはだんだん早くなつて盛り返上がつていくということがない。淡々とした静かな踊りだ。衣装は、全くの普段着である。鹿児島その他の地域の祭りでは、浴衣を着て踊る姿をよく見るが、かつては生活していたそのまま



写真1 土俵前の祭壇で拝む



写真2 5時になったので踊りが始まったが、人は少ない。

の格好で踊っていたのだろうか。その姿が浴衣であったり、いわゆる着流しであったりしただけで、要は普段着であったのではないかと思う。そういう意味では、古い習慣を残した装束だとも言えるのではないだろうか。早朝ということもあり、浴衣よりしく寝起きのまま家から飛び出してきたのではないかと思われる方もいる。これも行事と地域の密着度を逆に物語るように思われた。

この日の日の出は午前七時二分。それより前に空が白み始める頃、踊りは終わった。途中雨が強くなり、アシヤゲなどに避難して中断もあったが、静かに踊り続けた。

踊りが終わると、皆それぞれ家に帰る。家に帰り、日が出た頃、前日に取っておいたススキを家屋の四つ角の軒に挿す。トタン葺きの家が多く、トタンと部材との間に挿す家が多いようだ。また、木造ではない家では、屋上の四隅にススキを置くようにしている家もあった。草葺きの家であれば、簡単に挿せたと思われるが、現代的な建築になればなるほど、ススキを挿す場所がなくなる。

先祖代々シバサシギン（しばさし着物）を伝えている家では、床の間に衣装を飾りミキや米、塩などを供える。シバサシギンはノロの衣装だと伝えているが、必ずしもノロの衣装だけではないようだ。

床の間に向かって平机を置き、その上に衣装をたたんだ状態で並べておく。それとは別に高膳を据え、ミキなどを供える。

以前はミキも各家で作る所が多かったが、現在では市販の物を買ってきて供える家が増えてい



写真3 シバギンを供える。

ると言う。

下野敏見氏が昭和四四年に調査した際には、シバサシギンを縁側に向けて座敷に広げ並べて、その手前にミキの入った腕を五つ並べ、その更に手前に高膳を据えて、香炉一つと杯を五つ並べて、主婦が外に向かって拝んでいたと言う。下野は「シバサシの神は外からやってくるのだから、外に向けて拝むこの形式がもとの形だと思われる。」と述べている。

公開された集落の祭りではなく、家々での祭りなので、その時々の変化があるかも知れない。

【意義】

シバサシは、シバサシ単体で見るとではなく、ミハチガツ全体として意義を考える必要がある。現在、奄美大島の観光案内や行政文書などではミハチガツを「三八月」と当てることが一般的である。しかし、この旧暦の八月の前半から始まる行事が、この地域での稲の端境期であり、生産暦の中で収穫が終わり、次の播種までの間であることを考えると「新八月」と当てるのが妥当ではないかと考える。

琉球方言では「新しい」ということを「ミー」という。これは本土方言で言えば「にい」と言うことで、「新盆」や「新嘗祭」の「にい」である。本土方言の n 音が、琉球方言では m 音になるので、「に



写真5 アシャゲにもシバを挿す



写真4 屋根の排水溝に挿しているところ

い」が「みい」になる。「庭（にわ）」が「みやー」になるのと同様である。

すなわち、ミハチガツやシバサシは、新年を迎える行事であり、本土の正月が親祭りであることと同様に、祖先を迎える祭りでもある。

本土との大きな違いはその時期である。鹿児島県の仮面神が正月や小正月ではなく、旧暦の七月から八月にかけて現れるのと同様に、同じ意味を持ちながら時期が半年ずれていると考えることができる。

シバサシやミハチガツ行事は、日本全体や南西諸島の暦と、それを生み出し使ってきた人々の生活を明らかにする上で、貴重な文化財となっている。

【参考文献】

- ・下野敏見 二〇〇五 『奄美、トカラの伝統文化…祭りとノロ、生活』 南方新社
- ・小島瓊禮 一九八四 「アラセツ（新節）」『日本大百科全書』小学館

（小島 摩文）